

「人生の十分に開展するや、近代世界は新しくして大なる無数の富を齎すこととなり、何人もその影響より避くることを得ず、吾等は皆その成果を喜んで享けて居る。されど此の明白なる收穫あると共に、獨特の傾向が其の中に織込まれて来た、疑惑と衝突とはこれより生ぜざるを得ぬこととなつた。十七世紀の初期以來、近代世界は、基督教より遠く離れたる生活の新型を作出したのである。……此の新型が獲得する力と自覚が大ならば大なるほど、基督教と兩立し難き、さ明かになるのである。實際、此の二の根本的傾向は互に直接の衝突を來し、初代に存したる、其の平和親密なる協力は最早や不可能ならんとして居る。兩者が明確に理解し合ふことは益々必要となれど、殊に近代の傾向に追従せる人々の基督教排斥は絶えず、愈々苛酷になりつゝある。」「大思想家の人生觀」、英譯二百九十七頁。

斯くの如くにして現代には、人生に關して非基督教的理想を掲げ、嘗に基督教的理想を受納れざるのみならず、オイケンが或所にて言へる語を用ふれば之を「人生の精力と其の眞諦の敵」として激烈に反抗するものがある。此のオイケンの語は基督の法則と福音とに對する感情を表して居るのであるが、之に就

いては今日種々の見解現はれ、從つて吟味を要求して居るのである。

其の最も有名なる二代表者は、恐らくニーチエとデヨルデ・ペルナルド・シヨ
 ーであらう。ニーチエは基督教を根本的に「破碎」する唯一の方法は、其の倫理的
 理想を斥けるにありとなして曰く、「人々が耶穌を驚嘆し、彼を己が理想となせ
 る間は、假令福音歴史を駁撃するも何等の效果なかるべし」と
 斯くニーチエは非基督の精神に狂喜して、「高貴なる道徳」を説教し、犠牲的獻
 身は虚弱なる人間の主義に過ぎないと宣言して居る。予は最後の章に於てニーチエの
 我英國のシヨ一氏に至りては、基督者にしても、其の他の者にしても、凡て道
 徳上の制裁若しくは抑制をなすことを排斥し、如何なる場合にも衝動の命じ得
 る所を阻害する倫理的區別を斟酌することを拒絶し、所謂自由の福音なるもの
 を公言して居る。斯かる自由が人生に及ぼす影響を察すれば、多數のものは、
 之に反對すべきも、シヨ一氏は然らず、次の如くに書いて居る。

「若し若き女子が、義務、犧牲等の説教に甚く反動せる気分にて、己れ自身の本能を惨殺してはならぬ、たゞ口先の空虚なる語句に服従するために、己が生涯を抛棄してはならぬと決心したる旨を手に告ぐるこそあらば、予は答へて言はん。」如何にもして御身の主張する如くになせ。如何ばかり悪しく成り得るかを試みよ。其は御身が如何に善く成り得るかを試むるも全く同一の経験である。『藝術の健全』四十四頁。

是等の例は或は極端であるかも知れぬ。されど彼等は近代人の心中の奥深き所を観察して居る。殊に近代婦人は之を首肯する所があると思はれる、即ち人生には己れ自身に對する法則の行はるゝ領地ありて、其の法則以外の權威は、假令宗教若しくは基督の名を以てしても、畢竟「人生の精力と其の眞意との敵」に過ぎなくなる。ニーチエやショアの學派に關係なき道念理性ともに堅實なる多數のものも、藝術或は科學の如きものに就きて、猶ほ此の事に多少の眞理あることを感ずるではないか。斯かる領地に於てはよし福音の趣味全體が

没交渉でないにしても適當しないのである。若し人ありて、此の事を吟味することあらば、容易ならぬ結末に達するを見て驚くであらう。其の一例を擧げんに、若し其の人が希臘文學の美と情とに心酔するとせよ、基督教の勢力範圍より脱却して、人生の或區域内に於て専ら自律生活をなさんとすれば、近代の神經過敏な騒々しき區域よりは、寧ろソフォクリイズ或はサツフォアの精神充溢せる穩健華實なる區域を擇ぶこととせよ。然らば彼は福音上の疑問や其の招致に就いては、常に興味を感ぜざるのみならず、殆ど無意義にも覺ゆる世界に出づるであらう。而して其の自律生活をなし得る處は、常に藝術や科學の如き高尚なる知識的生活に關係する所のみならず、感情的生活に於ても異なる所がない。例へば——多數の人は其れを其の儘に表はさないやうに用心すれど——人間の戀愛でも君主の如き絶對的權勢を有して來るものと感ずるではないか。斯くの如き思想と、基督を生命の法則となし「總ての主」となして最高十全の王冠

を捧ぐる福音主義とを調和することは、常に容易でない。其の結果、道徳上福音主義より獨立して、積極的に非基督主義を標榜するに至らないにしても、前述の如く基督者よりは更に廣潤なる生活あることを思ひ、(エドモンド・ゴッスがウォーター・ペーターに就いて言へる語を用ふべくば) 賢者は其生涯を『悉くアポロに致す可らず、また悉く基督に致す可らず』(イー・ゴッス著「クリチカ」頁。と云ふが、當然であると思ふに至る。此所に信仰に取りて、物質主義の囂々たる論議よりも遙かに油斷のならない疑問がある。現時、歐洲文學に於て、最も文雅なる懷疑的思想家の筆になれる中に、此の事を完全に暗示せる一二の文を見ることが出来る。エム・アナトール・フランスの書中に、回心して基督教生活に入つた婦人が「真理があるから」己が精神上の教訓者を信ずと言つた時、第二世紀の代表的教育ある希臘人ニシヤスは微笑しながら、之に應へて「私にとりては、私は多くの真理を有つて居る。彼は唯一つを有つて居るだけ

ど、私は總てを有つて居る。私は彼よりも富んで居ると云つた」(「ダイス」二頁。是は現代人の心中に深く潜める所の思想である、基督者の人生觀よりも更に濶大、更に豊富、多様な或者を有すると云ふ思想である。是に於て吾等が師と仰ぎ「總ての主」と呼べる耶穌の要求と調和せねばならぬものがある。之に就いて基督教界の一大宗派の解答となせる、彼の禁慾主義の解釋が、此の場合に適應せざることは言ふまでも無い。此は來りて飲み食ひすと云はれた耶穌基督の精神を解せず、又福音のために花々しき犠牲となれる間にも世俗の生活を禁止することなく拒絶することさへななかつた使徒等の行為に忠實でないのみでない。若し制慾主義が完全に普遍に適用せられたならば、其の結果は人類の救拯とならず、却つて自滅となつたことは明かである。此の困難より脱天主教は基督教的生活を二種に區別するのである。其の一は制慾主義を守れる(結婚も禁ずる)高級なる聖徒の團體が「宗教」生活をなし、他の一は世俗にはそれにて足れりせざる「世俗」生活をなすこととしてある。然れども聖徒と基督者との區別は、新約聖書全體に見當らざるこそであつて、全く非基督教的の區別である。禁慾主義は或る人或る時代に

は是認せられもしよう。基督は歸依犠牲を要求することを世間に思ひ出さしむる効力はある。然れど、生活の一般原則とはなし得べきでない、又基督教的生活の一般原則でない。しかし他の一面には此の問題を軽々に見做す傾向があつて、耶穌基督を見ること、只藝術、學問、小説、其の他人間の興味に關するもの、一種の名譽總長より以上には殆どなつて居ないと云はねばならぬ。これは問題を弄ぶに過ぎないのである。若し耶穌基督が主でないならば、彼は則ち皆無である。彼は基督教的或は半基督教的の色彩を以て、微かに事物を色取るものではない、彼は命令するものである、無上終局の權威たるものである。或讚美歌に歌へる如くに『主は何處に來たまふとも治めんために來たまふ』のである。之より以外の基督を語るは、實に福音を弄ぶと云ふよりは寧ろ辱しむることとなる。問題は即ち自律生活を高調して、容易く福音に服従せざる人性の多様な方面に對する、此の基督、此の主の關係如何んと云ふのであるが、之を論

ずるに、神の美しき世界や、神が吾等に與へたまへる人間性質を惡魔の領分に貶すが如き、精神を以てしてはならぬ、其れよりも一層濶大なる精神を以てしなければならぬ。而して又基督の位置をたゞ申譯けに人生の或一隅に設けて、之を論ずるやうではならぬ、其れよりも一層的確分明なる基督教の立場に據りてなすべきである。

此の問題に就いては、前項に掲げたる數種の例を二様に分ちて截然たる區別をなし、別々に論ぜねばならぬ。基督教的ならざる自律生活をなさんかために愛、自由、(一身上の意味にて)幸福の如き個々の主觀的目的に對する要求を其の一となし、藝術的美、科學的眞理の如き一般の客觀的目的に對する要求を他の一となして、之を順次に思考すべきであるが、其の孰れの場合に於ても、人生と云ふ抽象に就いてプラトン學派の如き議論をなすことなく、活ける經驗に依りて此の事件の實證せらるゝやうに試みたいと予は思ふのである。

斯くの如くにして前者の場合を見れば、遠く其の解答を求むることを要しない。何となれば人生其の者が判然たる擬れなき解答を提供するからだ。試みに幸福、自由、愛の如きものを得んために、基督教其の他一切の權威を排斥して、無節制なる絶對的の自律生活をなすとせよ。之が其の人に取って失敗と不幸とに陥る直接の確實なる途となることは、争はれざる人生の事實である。予は前節に擧げたる戀愛に關聯して、一層委細に此の事を觀たいと思ふ、これは輕率に不誠實に記すは容易きことなれど、元來人間生活に深甚の影響を有するものなるが故に、恐らく吾等の議論に取りて最善の例證となるべき題目であらう。

戀愛、通俗の意味にて云ふ戀愛は重なる文學の題目である。殆ど凡ての小説が之を説いて居る。されば若し誠實なるものならば道徳上無益なりとも、之を除外せずして近世の代表的小説中の何れの書を読みにしても、其れが戀愛を行爲上の絶對的支配者として、眞摯的確に人間一生の物語を記してあるとすれ

ば、吾等はその何を見出すのであるか。予は思ふ、眞に權威ある信憑すべき書にして、結局戀愛を不運に陥らしめて居ないものは殆どないと。其の不運が必ずしも直接不幸を來すとは限らざれど、氣品高き靈魂も、之がために漸次凋落して、齡と共に卑く陋惡なるものとなることを免れない。人生に於ては確かに斯くなるのである。これは或種の著作、若しくは或型の品性に限らない。實際數ふるに値するほどの作物の教訓となつて居る。アンナ・カレニナ(姑らくなりとも彼女を斯かる仲間に入るゝは予の本意にあらねど)の如き優秀なるもの、閱歴にも、ヒツチエ 氏の描ける墮落と同様の教訓がある。斯くの如き書の結末を斯くなすものは、慥かに神學上、道義上に於ける正統説ではない、正しく人生である。何となれば、人生は此の人間の慾情に就いて二の主なる事を云つて居るからだ。其の一は——詩人小説家をして全力を擧げて終始之を稱揚せしめよ——この「地上に幸福」こゝにありて之を知れる人こそ、他の事ならで此の

事のために、「我は生活す」と言ふことである。二は、此の故に自律生活の中に愛を孤立せしめ、たゞ自己一身上の法則となすに止らしむれば、其の生命は必然滅亡するに至ると云ふことである。實に戀愛は人生機關の他の部分に關係し、また其れによつて調節せらるゝでなければ、眞の戀愛、最高の戀愛とはならぬ。スチーヴン・フキツプス氏の作「バオロとフランチェスカ」は此の不朽の題目に就いて、深遠なる説明をなせるものではないが、其の中に戀人をして、其の熱情の昂奮せる餘りに言はしめたる句に曰く、

今や我を捉へたる

一切の絆を抛げ捨てん——名譽も尊貴も、

一切の束縛も、一切の友情も、平和も、生命其のものも、此の宇宙間、我の要するものは、たゞ御身のみぞかし。

「メウロミフランチェスカ」第四齣。

豪俠なる詩人リチャード・ラヴラスは之に比して幾分か眞實なるものを悟つて居た。彼が武士道の精神に鼓吹されたる作の中にて、予が最も美しき聯句であると推賞するものに曰く、

我は御身に優りて名譽を愛せざりしならば、

われは御身を愛すること能はざりしならん。

若しアンナ・カレニナが聰明なる理解力と、人生に對する感情、感覺の器量に加ふるに、此の事をも知つて居たならば、彼女の賢明なる決してモスコイ停車場に演ぜられたる悲劇の暗中に没じなかつたであらう。吾等は今も猶ほ此の一段を讀む毎に、其の悲劇が親しき友の身に起りしかの如く、苦痛と恐怖との思ひをなすのである。

是に於て人生と、人生に關する最良の文學とが語る事實は、即ち是の如き事物を絶對自律のものとなすは、却て之を破壊し滅却するに過ぎないことである。斯

かる事實の存する理由は、曩きにも陳べた如く既に明かである。人生は組織的統一なるが故に、其の一部分を獨立せしめんとすれば、自から混雜矛盾を生ぜざるを得ない。若し吾等が一事を以て全體となさば、全體は乃ち之に反抗して自己を主張するのである。こは男女個々の自由、幸福、或は愛を全體の生活より取離して、それだけのものとなし單一絶對の法則となさば、人生は寸毫も假借する所なく、之を爲す人々に反抗し、其の目的を破壊するに至る。こゝに次の事を注意せねばならぬ。其れは肉體上の誘惑と稱するものに從ふに當りて、尤もらしき理由を立つるは、則ち破滅的の虚偽に陥ることである。彼等曰く、斯くなすのが自己に與へられたる本能に從ふことであると。此の種の暗示は之を公言するものは殆どなかるべきも、之を感じるものは尠くない、而して或者は之に反對するを難して居る。固よりその考へに眞理の要素の存すること、猶ほ危険なる虚偽にも多少の眞理があると同じことである。其の眞理とは人間性

質の一部分であり、然かも最も肝要なる一部分である是等本能が、肉體の中に其の自然的基礎を有すと云ふことである。然れども、部分を全體なるかの如くに取扱ふ所に虚偽が横つて居る。是等本能は單獨には人間性質をなして居るものでないから、人間を構成せる他の部分より孤立して、獨り人間全體の責任を負ふかの如くに、勝手に漂泊し、暴威を振ひ、はては主權を握るなどのことは許さるべきものでない。此の故に、肉體が獨り語るとも之に從ふべきものでない、從ふべきは人間全體の語る時である。人間が肉體（神學上に意味する肉體でなく、普通の意味にて云ふ）を有する間は、合理的、道徳的及び社会的存在者である。若し彼が己が肉慾の招致に應ぜんとせば、之と共に己が理性、良心にも聴き、亦他人に對する己が責任をも考へなければならぬ。されば諸君は必ず諸君自身に從へ、されど諸君の自我全體に從へ、然らざれば予の言へる如く全體をなせる所の生命は即ち諸君に反抗して、諸君を自滅せしめねば已まない

であらう。

是に於て次に吟味すべき論點が明かになつた。吾等が虚偽なる自我もしくは一部分の自我と區別すべき眞實の自我とは何か、或は何處にあるか。之に就いて或直接の觀念を得なければならぬ。こゝに再び曩きに引用したるシヨ一氏の思想に就いて言ふことが出来る。シヨ一氏の語は若き女子が「己が本能を慘殺してはならぬ……と決心した」と云へるに對し、如何にしても彼女の出來得る限り惡を爲せ、これは或者が出來得る限り善を爲すと「全く同一の經驗」だからと云ふに外ならなかつた。之を讀みて露骨に惡所に案内するものであるとなすは、不公平、不見識なる批評であらう。固より其の如くに讀まれないではないが、惡い事には多數のものが斯く讀むのである。此の點は自から道德家なるシヨ一氏が、己が道德に關する使命を紹介するに、惡徳の用語に依ることを以て、如何にも面白しとなせるが如くに思はるゝ一例に過ぎない。予の解する所

によれば、著者の論點は彼の女子が外形上の道德一切の檢束より脱して自由になること、彼女の道德は彼女自身のものであらねばならぬと云ふ所にある。これは眞實であるのみならず、稍や巧みに隠れては居れど、基督者の觀念にも、これあることは附言し置かねばならぬ。凡て道德的行爲が實際内心より生ずるは確かなれど、シヨ一氏は外部のみにて十分なりと考へ、思想が其所に止つたかと思はれる。彼惟へらく行爲の起原動機が、斯く内心にありとしても、倫理的性質に關係するものでない。或人の性質に善に對する熱心あらば、彼をして善ならしめよ。他の者に惡に對する熱心あらば、彼をして惡ならしめよ。これは「全く同一の經驗である」。絶對の自由は即ち萬事である。斯かる説は伏魔殿に公然認可狀を與ふることゝなれど、予は此所に是を極論しない、予の言はんとする事は、此が人生に關する眞の學説でないことである。何となれば人生は自由なると共に又方針であるからだ。方針なくば自由は危険であり、且つ無

意義である。人に疾く進めと告げながら何處に進むべきかを告げないのである。アウグスチンは能くシヨ一氏の知らざる所を知つて居た。此の先哲が「擇べよ、さらば力を得ん」と云へる語には、近世の劇作家シヨ一氏よりも偉大、賢明、完全なるものがあつた。其れにはシヨ一氏と同じく「爾の主張する如くなせ」との意味あれど、先づ第一に目的と對象とを掲げてある。アウグスチンの所謂目的は固より神と善を愛するところである。是れ方針を有する自由にして、其の自由の中には意義がある。人間は自から發見し、創造し、到達すべき自我でふ目的を有する存在者なるが故に、方針を省ける言説は、人間以下の存在者に對する言説に過ぎない。シヨ一氏の言説は乃ち理想も向上心も有せずして、現状の儘に安んずる動物には、能く適當するかも知れない。是に於て彼が演説の聽聞者となるべき動物は、或は山神の種類ならんと予は思ふ。イブセンの劇に據れば、山神(北歐神話にあり)は激烈なる慾情と我儘なる衝動とを有して、半獸生活

をなせる種族の存在者である。而して彼等は人間の生活を望まないから、其の生活が彼等の理想であること、其の一人の言へる如くである。

人の間に行はるゝ諺あり、「人よ、爾自身となれ」と。

吾等が住める郷國には山神の族の間に行はるゝ諺あり、

「山神よ、爾自身に十分なれ」と。

ピイーヤ、ギント、第二節六節。

シヨ一氏は彼の青年女子に向つて曰く、「御身が眞の自我てふことに就いて憂ふること勿れ。御身を支配する激烈なる本能が如何なるにもせよ、其の如くは成れ、其れにて『十分なり』と、是れ全く山神主義である。其の種族に取りては『十分』ならんが、人間存在者に取りては不十分である。こは自由てふ高大神聖なる名義の下に、俗悪なるものを男女に提供する頑迷者のなすことである。然れども予は引照に公平ならんことを欲する如く、著者にも亦不公平なる

ことを欲しない。或はシヨ、氏は見掛けよりも、自己を高く観るやうに獎勵せらるべき必要があるかも知れぬ。然らば彼をして人間存在者の教訓者たるべき才能なきにあらざることを信ぜしめよ。自己を吹聴するもの、多き現代に斯くも遠慮勝ちなる著作者を見るは稀なれど餘りに遠慮して山神種族の教師たる哀れなる位置に安んずとすれば、誠に以て遺憾なことである。

斯かる推賞の辭を残して予はシヨ、氏に別れ、僞我より區別すべき眞我、即ち完全我とは何かとの疑問に移り、而して予の言ふべき主要なる唯一の論點を直に述べることとする。俱にこの問題を考察すべきものは耶穌基督以外絶對的に一人も無いのである。彼は山神種族の教師ではなかつた、「これに生命あり、この生命は人の光明」であつた。爾來、人間生活に關する夥多の危険なる概念は、畢竟彼より離れて得たる觀念より成りたるものに外ならぬ。曾て耶穌基督より己が眞我に關する思想を學びたるものにして、其の心中に結局、不満足の

思ひをなしたる者は無いと云つて可い。此の事は人間生活全般を概括して立證せらるべきものでない、最も個人的に徵證せらるべきことであつて、個々の心意と良心との中に徵證せらるのである。何人にも眞に其の生活を基督の御前に携へ往かば、常に神に就いて新思想を得るのみならず、恐らく一層的確に自己自身に就いて新思想を得るのである。而して失敗と罪惡とを意味する惡しき自我を實覺するのみならず、最初には屢ば此の事もあるが、更に己が眞性質を觀、また己が生活の如何に成るべきかを觀るやうになれば、之に就いて一層價値ある思想を得るのである。耶穌基督は實に不思議にも人間の最善我と一致する。吾等が基督と交はることは、即ち亦た神と交はることとなる。これは宗教的經驗の事實であると共に、亦た道徳的經驗の事實である。何たる驚くべき人格ではないか。彼を識るは即ち神を識ることであり、彼に到るは即ち己が眞我を得ることであると！。

是に於て吾等が考究せんとせる問題、即ち幸福、自由及び愛の如き人生の大なる人道が、如何にして『萬物の主』と呼ばるゝ基督に關聯するかに就いて、吾等は其の解答を見出しつゝあるかと思はる。其の解答を一言にせば、即ち是等のものは眞我の統一に關係すべきものにして、而して眞我は基督の中に之を見出すのである。之が如何にして如上の統一を解決するに至るかは、無論概括的言辭を以て言ふことが出来ない。何となれば人間生活は個人的生活でなければ何にもならぬものであつて、而して耶穌基督は本來各個人の師たり救主なるが故である。然れども人生を破壊せんために來らず、却つて之を豊富にせんために來れりと言へる基督の宣言を正當とすれば、其所に確かに解決の道がある。現代の一詩人の有名なる詩中に、事かくならずして、基督に自我を與ふるは人生の美しき人道の否定を意味することになりはせぬかとの恐れを歌つて居る。

われ彼の愛を知りて従ひたれど、
然かも彼を得んためには他の一切を失ふべきにあらざるか、
われ痛くこれを怖れたり。

フランシス・トムソン作
「天の狐犬」

然れども使徒は吾等が基督のものとなれば、萬物は乃ち我ものであると云つた。此の事は人生に就いて吟味しなければならぬ。自由も幸福も次の如くに吟味すれば如何ん。一方にては、何にても吾等の『主張』する事をなし、無差別に己が『本能』を満足するものあり。他方にては、『基督の神聖崇高なる意志に悦服し、之を遵奉するに到るまでは、吾等が慾望は、畢竟人生の破壊者にも劣れる使者である』と云ふ（これは聽て經驗の是認する所）信仰を有するものありとして吟味せば如何ん。ホルト著「道と眞且又、愛に就いても次の如くに吟味して、是が人生に於て果して眞なるか否を見るときは如何ん。愛に二人の者あり、耶穌基督を愛し、彼に従へば從ふに隨つて、彼等相互間の愛も亦益親密にな

り、永續的になると云ふことを吟味せば如何ん。予は之に對して他の側面あることを否定せず、又曖昧にもしない、却つて人間の要求によりては、基督に拒絶せらるゝものゝ存することを認むるのである。吾等の中、誰か此の事のあることを知らざる者あるか。若し吾等の中に檢束すべきもの、切捨つべきものを一向に見出さざる基督ならば、眞の師にても教主にてもないではないか。されど是とても只人生の一部分を否定するのではない。或本能的の自由若しくは歡樂を要求するにしても、若し基督其の中に在さば、其れが更に高貴なる自由、高尚なる幸福に導かれゆくのである。心情の或需要の中に拒絶せらるゝ所ありても、之がために彼の詩人よりも優れる或者即ち「遙かに高き人間の熱情を呼吸する」キーツ作「希臘古瓶」を見出すことが出来る。これは何等か現實にあらざる神秘的のものやうに聞ゆる所あれど、基督教の多數男女の経験中最も確實なるものである。基督のために、己が將來の希望を抛棄して、其の青春の生涯を

或困難なる事業に捧げしによりて、却つて比類なき自由と歡喜とを得たる男子、基督の招致に應じて、獨り寂しき途を歩み、夢見る時の外には、或は己が子ともなりたるべき幼兒の觸るゝことを感ぜざれど、其心は温情溢るゝ愛に充ち、己が生涯につけても常に感謝の思ひ豊かなる女子の経験など、最も確實なるものである。「己が全心を神に捧ぐれば神より大なる思恵を享け、己が生涯の更に深く更に高くなることは日々の経験に知らる」ルイズ・ゲーマーズの「基督教とは何ぞや」按には拙著「基督の事實」を批判的に吟味したる所あり。必ずしも其の意見を同ふするにあらざる著者に對して、懇慫に公正なる判断を下せる此の批評者より引證することを得るは予の愉快とする所である。のであるが、是は餘り多言すべきものでない。此は基督の僕たる人々の生涯——しかも其の顔面——に就きて學ぶべく其の外如何なる書籍に就きても讀るべきものでないと思ふ。

予は今や第二の疑問に移り、一層簡單に之を論ぜねばならぬ。第一、基督の法則と福音が、科學的眞理、藝術的美の如き普遍的、客觀的理想上に對する關

係は、これまで吾等が思考したる如き個人的、主觀的目的との關係よりも更に廣潤なるものであることは明かである。是等普遍的理想上の事物は眞に神のものにして、之を助成するは神を讚美し、神に奉仕する一部分である。彼等は根本的に宗教的なるにも拘はらず、如何にして個人的敬虔の宗教に對して、有力なる敵手と思はるゝに至れるかは、敢て考へ得られないではない。先づ宗教は單に人間の福利を増し人間の要求に應ずるよりも、廣き範圍のものなる事——宗教は斯かる人間の事柄よりして、歴史上に現はれ來つたとも云はれるが——又單に基督者の靈魂のみならず『全地』にも『神の榮光の充てる』ことを記憶せねばならぬ。斯様に科學が世界を研究し、藝術が世界を描寫し解釋しつゝある時は、其が中にある神の榮光と、信條第一條にある『天地の造主、全能なる父の神』の御名を宣しつゝあるのである。其の中には主我的の自由、幸福、若しくは情慾に關する個人的追求よりも更に以上の或者がある。されば

ルヴェイン或はワットの如き造物主の僕なる人々の宗教に對する關係を、眞の神も眞の人間をも知らざる神經失調者、或は無政府主義者の主張と混同してはならぬのである。

予は此の第二の疑問を（第一の疑問に就いてなしたる如く）勉めて實際的に考察しようと思ふ。されど科學や藝術が宗教に對する關係を釋ぬるに當りて、先づ此所に理論的性質を有する一の注意をしなければならぬ。神は造物主なるが故に、總括的なる有神主義の意味にて是等の科學や藝術が宗教に關係すべきも、特殊的なる耶穌基督の福音に直接關係するものでないとは吾等の考へ易き所である。基督教の特徴は確かに人間の救済にある。然かし又最も大膽にして偉大なる基督教の思想は、基督教が其れより以上でないことと満足せず、基督には別に宇宙的、並に救世的の意味の存することを主張するのである。使徒パウロに取りては、基督は人間の救主なると共に、造られたる宇宙の

第一原理(第一原理)であり、又 τέλος(最終目的)である。然れば「萬物の造られたるは彼のため」にして——即ち基督を目的として造らる——而して萬物は彼の中に總括せらるるのである。以弗所書一章二十節。又「吾等人間ののために、また吾等が救拯のために降りたまひたる」云々の救世的基督を斷定するに先ちて、「天にあるものも、地にあるものも、凡てのもの彼に由りて造らる」との宇宙的基督を斷定せる其の高尙なる教理が、ニケヤ信條の中に其の位置を占めて居る。然るに基督教思想が——主に神の人間救拯に關する思想に占められたる歐洲西部地方に於ては殊に——此の概念を確守せず、又有効に發達せしめなかつたことは事實である。次のライトフートの語には目下の論旨に多少關係する所がある。

是を等閑に附するがために、神學上の概念が深く深くならないのは一考して解るべきであらう。若し神學者が科學の顯現及び歴史の發達をば、己が宗教的向上心の中心なる「神の言」の作用

に、平素連結して思考するならば、彼等の前者に對する同情が如何ばかり深厚になるかは、云はずして明かである。斯かる觀念を承認すれば、其れより流れ出づる活ける影響は、他の何れの處にも得られざる結果を生じて、吾等は其れによりて、信仰と智識と敬虔と研究との調和より成れるより「廣大なる音楽」の絃を弾づることが出来るやうになるであらう。「哥羅西書註解」百十六頁。

他の一方に於て、理論的性質を有せる教理を、一般的咏歎的に記述するは、其の根據となし得べき理性、歴史若しくは經驗の基礎を述ぶるよりは、一層容易なりとのことを思はなければならぬ。而して若し神學が科學としての立場を保持せんと欲せば、常に其の教義の據つて立つ基礎を有せなければならぬ。博士デニイは曩きに引證したる使徒パウロの語が、基督を創造の鍵として斷定するとせば、其れは「科學でなく智慧」無窮の道であるとして云ふ。予はプラトーンが詩に就いて謂へると同一の筆法にて、之に就いて言はんとす。其れは「智慧でなく一種の天才若しくはインスピレーションに由る」辨證論、のであると——智慧は多少經驗

的なるものを暗示するが故に——。信仰といふ崇高なる問題の根柢に、天才若しくばインスピレーションありとするは正當である。何となれば、基督と彼が宇宙に於ける位置に就いては、如何に過大に考察するも過ぐることがないからである。然らば、彼の信條の中の此の項目に就きテルツリアンの語を改訂して『崇高なるが故に信ず！』と云ふも可ならんか。兎に角、——理論的方面を措きて——此所にこの思想を實際的に應用することが出来る。之を研究するに當り吾等をして科學若しくば藝術の如きものと、一般的に神の存在を信ずると云ふ意味での宗教でなく、特殊的なる耶穌基督の律法及福音との關係を考へ、又人間利害に關する此等大地域に對して、基督が何を意味するかを問はしめよ。議論を簡潔明瞭ならしめんために、予は再び主として一の例を用ふる。前節には愛を擧げたが、此所には藝術を擧げよう。藝術は廣き問題であるから、以下の言面に對して一様に適用されぬと思はるゝかも知れない。此所 吾等は皆「藝術は藝術の爲なり」に論ずることは其の位置に關する概観に過ぎぬのである。

との格言あることを熟知して居る。これは藝術の交渉すべき題目、若しくば其の方法に就いて制限的規則を設けんとしたる道德——殊に常套主義若しくは清教主義の道德——方面の計畫に反抗して、奮闘したる人々の一種の旗幟である、或は旗幟であつたのである。其の點に於ては十分に合理的であつた。藝術には道德家の侍女たることを拒むべき權利あるに相違ない。されど「藝術は藝術のためなり」と云ふ語は頗る穩當でない。寧ろ藝術と道德と兩者互に或手段となる所に道理がある、孰れも其の一方の手段となるには非ずして、兩者相携へて更に大なる目的に達する使者となるのである。其の目的は全く人生其の者である。(高級の様式を有せる)藝術の作品は單に其の作品のためでなく、人生を表現すべきものである。科學者、哲學者、若しくは説教者の如き迂遠なる教訓的方法にて之を表現するのではなく、實際活ける物の如く吾等に之を見せしめ、之を感ぜしむる方法で、之を表現するのである。吾等は大藝術家の作品を指し

て宛然活けるが如しと云ふ。又其の作品に依りて吾等の知覺は敏活になり、感情は増進するに至る。此の故に「藝術は藝術のためなり」との狹隘偏頗なる定式を去りて、藝術は人生の爲なりと云ふ更に公正寛宏なる定式を用ふべきである。上文を書いて後、點附きたるは、アーサー・ランソム氏の近著「ポートレイツ、アन्द、斯く言はゞ最早や序言を費さずとも、吾等は既に藝術と福音との間の關係問題に對する解答の眞核に達して居るのである。藝術が道徳に檢束され其の檢閲を經る所に其の關係のあるのではない。其れよりも遙かに根本的なるものがある。吾等は云ふ「藝術は人生のためなり」と。然り、人生は耶穌基督以來新しきものとなつた。人間生活の如何なるものであるかに就いて——自然生活の如何なるものであるかに就いても——人性は彼より新しき幻象を得て居る。されば人生を表現することを以て本務となせる藝術は、基督者とは何ぞやと云ふこととに就いても一々關係せねばならぬ。こは單に理論的提案でない。人間の精神

全體が基督教に由りて、如何ばかり人生及び自然に關する見解を深くせられたかと云ふことは、人間思想の歴史上に於ける中樞的一大事實なのである。初代教會歴史の或時期に於ける特徴ある藝術に對して、基督教が敵意を有し、偶像破壊的の所業ありたることに固執するものは淺く偏したる考を以て此の問題を讀むものである。固より斯かる敵意を有したることは事實である。其の主なるものは當時の藝術が罪惡と公然組織的に親密なる同盟をなしたるを以て、之に反抗せる戦争の一行として正當とせられたのである——戦争には多くの暴なることも必要である。然れども藝術上、或は歴史上の學者にしても、識見あ公平なる者は、悉く是等偶像破壊的の所業が、單に偶然の事件であつたことを認め、而して基督教が藝術に對して有したる實際の大勢力が、之を新にしたことを認めて居る。是れ基督教は前述の如く人生を新にしたからである。此の點に就いては基督教に偏倚せざる藝術上の著名な著者より數言を引照すれば足る。

デヨン・アデングトン・シモンツ曰く、

『之と同時に人性の能力は新しくなり、感受性は廣くかつた。宇宙の秘義に關しては、一層深奥にして生氣ある感情が現はれて來た。不可解なる無限連続の一部分としてに非れば、吾等が生活は此の儘にては決して圓滿完全なるものではないと觀らるゝに至つた。是に於て純然たる美術的様式の言辭を以て此の世界を解釋することが不可能の事となつた。實に斯かる精神の勢力が古代から近代世界への経過を標識して居る。』〔希臘詩人〕第一編 四百三十四節。

第二位の作品にしても、今日匹敵するものなき希臘古代の非凡なる藝術と吾等との間には全然相異なる世界がある。或意味に於て吾等は希臘に對して衷心より驚嘆を禁し得ざる所もある。其の由つて來れる本源には——藝術に對する關係に就いてのみならず、人生に取りて——斷えず學ぶべき至重の價値あることとならんが、基督の來臨せる——此の世界は——最早や再び純希臘たるべきものでない。假令基督教前の藝術が其の天才の極に達したとは云へ、吾等が生活

を眞に表現すべき藝術は、其れよりも以上であらねばならぬ。こは希臘天才に心酔の大作家等も眞實なす所である。例へばキーツの思想の發達にも、亦其の後にヘイターにも、此の事實が存して居る。之を認むることを厭へる人としてはオスカー・ワイルドが其の一例である。彼の生涯に就いてはこゝに言はない。さればシスチン・マドンナには希臘女神の像にあらざる或者が存し、ミレ一の畫はキーツの優麗なる短詩『瓶』の光景にあらざる所の意味を有つて居る。更に之を詳論すれば何よりも興味あることとならんが、予は今其のために筆を費すことが出来ない。

此の點よりして本章を終るに先ちて一言すべき事がある。予思ふに單に肉感的、不道德的なる藝術には、只最初一見して抗議の生ずるのみならず、哲學上正當なる理由より抗議が現はるゝものである。是れ藝術を婢僕となせる『人生』の名に由れる抗議である。眞個深遠なる意味の人生は未だ藝術に表現されざるのみならず、却つて肉慾を刺激することを以て唯一の目的となせる藝術のため、實際上汚損され、拒絶されて居る。之を償ふために如何なる美に就いて辯

解を試みるも甲斐のないのは、『美即ち眞』であるからだ。眞は常に曲線、色彩、形式のみにあるのでない。尙ほ深い所にもある。又天才が之を爲したと云ひ、此の故に『迷はず光明は天來の光明』であると言ふも詮がない。何となれば本章其の他に引照したるデニイ博士の正當なる注意の如く『天才は神の像に造らるゝものにあらず、人の像に造らる』『無窮の道』、ものにして、天才は寧ろ人間に支配せられ、其の婢僕となるべきものなるが故である。斯くの如くに實際生活に生ずる多くの難問題に、予は今立入ることが出来ない。此所には只其の一般的位置を述べに止るのである。一面に於て予はグラランデー夫人と彼女の見解を非認し、他の一面に於て藝術は人生に對して責任あるが故に、唯肉感のみ表現して、人生を墮落させる藝術は——或は人間を蔑視して唯物質となし、其の精神上的の感能を頑固になす科學も同じく——根本的に虚偽なる所あるを云ふのである。これは實に人生に對し反逆不誠實と云はねばならぬ。之に就い

て穩健なる思想家に自から生じ來るべき抗議に、假令、間違ひたる言説があり或は取るに足らざる立場に據ること屢ばありとするも、其は本來藝術を大使となし基督を正當の君主となせる人生の名の下になす所の眞の抗議に外ならぬ。斯く基督及び人本主義に關する全問題は論ずるに隨つて、其の結論に到着するよりは、寧ろ種々の方向に展開するを以て、予は今突然本章を終ることとする。佛蘭西の一記者ならんと思ふが(其の出所を明かにし得ざるは予は遺憾とする所なるが)、人間は二回の回心——最初は自然より恩寵に、次は恩寵より再び自然に——を要すと云つた趣旨を回想して、本論を終るのである。其の中には哲學も基督教もあることなるが、大偉人にして其の偉大なる所に完全せざるものゝ多くある理由は、此の二種の經驗の孰れかを缺けるが故である。ゲイテは偉人であつた。彼は屢ば完備した人の例として擧げらる。されど、彼は自然より恩寵に回心したることなきが故に、人間經驗の大なる領土、即ち人間の

靈魂の知れる最高最深の經驗に就いて、彼は描寫せず、又識別さへなし得なかつたのである。パスカルは知力非凡、精神卓越せる偉人であつた。されど、彼は確かに第一の回心を経たけれど、第二のものは殆ど彼の生涯になかつたのである。故に彼の基督教は——彼自身に取りては見事なる勝利の宗教であつたけれど——合理的なる理性と自然的なる生活とが善く一致して居なかつたから他のものに取りては幾分か信頼し難く適應し難きものであつた。如上の事を總括すれば、神は人間に二大賜物を與へたまうて居る。一は一切の興味と甘美と價值とを有する生命にして、他は彼の「言ふ可らざる賜物」、即ち耶穌基督である。斯かる賜物は人間のために、神より來つたのである。人間をして神より此の兩者を得させよ。然らば完全なる人となる。之を措いて他に「全體に生きる」ことは不可能である。予は斯く言ふ所に危険の存することを知らないではない。眞と愛とは吾等が濫用せんと欲すれば、常に濫用し得らるゝものなれど、

若し神より來れる生命を得、又十分に基督を得るならば何等の危険もあることを得ないのである。

第六章 死の否定力

前章には人の生の肯定を論じたが、本章には人生最後の大否定を論ぜねばならぬ。此の論題には前者の如き面白味はないが、避け難い問題である。たゞ人生の充實のみを語り、他の側面に對して目を閉づる如き人生哲學は適切でなく又正直でもない。甘美と興味とを有する温かき生ける此の世界の存することは事實であるが、人生行路の進むに隨つて、聽ては皆到着すべき冷かなる死の墓の存することも亦事實であり、拒む可らざる經驗の事實である。斯かる兩事實を熟視觀察すればこそ、眞の哲學と云はるゝではないか。是に於て人生を眺め居たる吾等、今や死を見なければならぬ。之を見るも敢て病的でない、正當なことである。

然れども、本章に於て其の經驗の事實をあからさまに論議するとしても、こみ入つたものとなつてはならぬ。この決定的疑問は元來至極明白なる疑問なるを以て、簡短なる解答を得れば可いのである。死に就いて彼此語を加ふること

沙漠に於て、猛獸に驚かされた旅人に關する東洋の物語は甚だ古いものである。怖しき動物より逃れんとして、旅人は水なき井戸に飛び込められたれど、其の底には口を開きて、己を呑込まんぞ俟ち構へた龍の居るのが見えた。不幸なる彼は、出づれば獸の餌とならん、さればさて底に飛び龍の口に呑まれん。已むなく井戸の或龜裂より生茂れる灌木の枝に縋り付いた。されど、手も次第に弱り果てたれば、やがて死の運命に陥るこゝかと思ひつゝ、猶ほも縋り付いてゐたがやがて灌木に白と黒との二匹の鼠が、靜かに遣ひ廻りながら、其の根を噛んで居るのを見た。旅人はこれを見て、今は絶對絶命、爲すべき術を知らなかつたが、不圖身の邊りを眺めて、己が懸れる灌木の葉に、蜂蜜の滴れるを見付くるや、彼は夫れに舌をつけ驚喜しつゝ、嘗めつくした。

予が人生の枝に懸つて居る様も此の如くである。レオ・トルストイ

は管に無益なるのみならず、また慥かに虚偽である。死の所業は自然の最も簡短なるものであるが、吾等が死の何なるかを表はさうとすれば、徒に精神を緊張して、精力を消耗するに過ぎない。文學上にてニユーマンの『ゼロンチエースの夢』の如きは、死を以て非常に細密な事としてある。されど人は死ぬるために左程長さ時間を要するものでない。音楽に於てストラウスの『死と變貌』は生命の分解につきて、戦慄すべき語を表はさんために、素張らしき音を次第に高く、築き上げて居る。されど、自然は静まり返りながら始終其の戦慄すべき語を表はして居るではないか。偉人の死する時すら然うである。グラドスト

トーン傳中に左の記事がある。
十九日の朝早く、家族は皆彼が病床の周圍に跪いた。彼は最後の昏睡状態に陥りて些の苦悶もなく息を引取つた。戸外の自然は、森も、廣き芝生も、遠き彼方の空合も最も美はしき姿して輝いて居た。モレイ著「虞翁傳」三卷三百二十八頁

グラドストーンの如き人格を作るために結晶したる凡ての知的、道德的、精神的要素を考ふると少しの否定が一切を斷絶してしまふと云ふ事實我等の心を打つてたゞ沈黙せしむばかりである。

この靈魂の嵐、このダイヤモンドの如き奮闘も、墓穴に撒き散らさるゝ細やかなる一握りの土塊によりて、安らかに静められて、休息に就く。ゾーゲル作「ナオールゲック」四篇八十六、八十七行。

是に於て大業な言葉は本章には適はしくない。優美な文章も畢竟見え透いた愚に過ぎない。時として得意なる辯士は、死を以て己が力量を發揮すべき好題目であると考へるが、實際死と云ふ最後の沈黙場に臨まば、彼は乃ち無言劇中で演じて居るやうに思はしめる。假し雄辯家ありて死に就いて語るとも何の益する所があるか。何人か死に對して言ふべきことがあるか。誰かこれに答へる者があるか。誰が或は何が、其の最後の語を有する權利を死より奪はんとする

か。是れ緊要なる事柄なるが、若し之に就いて言ふべきことあらば、平易なる
 數語にて陳ぶることが出来るのである。

兎に角、上述の論點に就いて考ふべきことは、若し死に生を拒否する權能あ
 り、又ありと見えるとすれば、それは果して現代の思想、熱誠なる基督者の思
 想を壓迫するやうな信仰上の故障となるべきか、若し故障とならば何れの點に
 まで及ぶべきかである。信仰の領域内にある人の思想でも、死後如何んと云ふ
 如き問題のために餘り占領されて居ない、現在の人生問題と、又如何にして之
 を高め之を救ふかとの問題のために殆んど全く腐心せるではないか。個人の不
 滅に就いて懸念するよりも、現世界の改善に就いて切實なる興味を有すること
 が、一層高貴なる心掛けではないか。斯かる疑問によりて暗示さるゝ如き傾向
 が近世思想に（教會内に於ても）存せることは明かである。其の結果、本章の
 問題は前章のそれほどに緊要なものとも思はれなくなる。地上には直接實際の

利害を有する神の王國問題あるが故に、死の如き問題に對しては興味さへも催
 し難く思はれぬでもない。斯かる思想の傾向に就いては、暫時吟味すべき價
 値がある。

先づ近代人が現世界の事に心情を集中せる所には、誠實にして氣品高き所が
 尠くないとも云はれる。たゞ己が靈魂の未來のみを懸念する劣等なる主我的の
 『後世安樂願ひ』などは排斥せねばならぬ。此の種の集中が皮相淺薄なる世俗
 主義に陥り易きことは——身體、精神、及び靈魂を果敢なき快樂や利得に没頭
 して、人生の實際問題、終局の運命に就いて眞率に思索する慾望も能力もなく
 なることは——勿論なれど、予は此所に之を論じない。然れども、其の善き方
 面を言はゞ、斯かる思想の近世的傾向は、屢ば高尚なる精神を以て現世に集中
 して居る。宗教を實際的にしたいと云ふ慾望、また人類の用に供したいと願ふ
 熱誠が現れてゐる。恐らく現代ほど斯くの如き慾望と熱誠とが人の心中に熾ん

になつたことはあるまい。此の精神が現世界に於ける人間生活の状態に、良心、心意、心情等の注意を促すこと如何にも痛切になつた爲、來世の思想を無視するに至つたと云ふも、敢て理解し難いことではない、宗教と雖ども此所には非難すべき権利を有つて居ない。然れども吾等周囲の世界の要求の切なるを思ふ故に此の觀察點は理解し易く又恕し易しとは云へ、地上に神の王國を擴張せんとする熱望に對する重大なる危険が斯かる傾向の中に横はれることを予は斷言する。予をして其の如何にして然るかを語らしめよ。

現世界に於ける人類の社會的救済は一大事業である。これは代々無限の精力と献身的奉仕なくば成就さるゝものでない。而して此の精力と奉仕とは、其の目的に適はしき深遠不拔の動機より生ずる緊張せる勢力に由らねばならぬ。然るに、人類救済に必要な精力と奉仕とに適はしき動機に、最も深くして缺く可らざる要素の一は、即ち人間の價値が無限であると言ふ意識であると言ひ

たい。此の意識ありて後始めて如何なる代價を拂つても人類は救はれる價値があり又救はれねばならぬ事になる。これよりも低い動機、例へば人道、親切、或は他愛心のみでは人類のために多くの事をなすとしても、總ての事をなすとは出来ない。かゝる動機から人類を更に善くせんために計畫をなし始むることあらう、又實際屢ばあることであるが、これだけでは最後まで其の事業を遂行し得ることは極めて稀である。予は必ずしも個人の靈魂不滅を意識せる信仰の伴ふにあらざれば人間の無限價値に關する此の緊張せる確信は得られないと主張するのではないが、前者を閉却しながら後者の勢力を保持せんとするも不可能の事である。これは敢て偏見なる正統派の豫想でない。最に謹嚴なる消極的思想家も否定し得ない所である。有名なる「エクシ、ホモ」の著者は次の如くに明言して居る。

宇宙は吾等が目前に漸次開展し、無制限の時間空間に吾等に次第に慣れて、吾等が思想の博く深

くなるに隨ひ、これに對照して自己の益、無價値なるに驚き、個々生命の小さく短く、且つは脆くして、愈々云ふに足らざることを覺ゆるに到る。斯くて何日しか道德的麻痺が吾等に潜み來るのである、暫らくは自己犠牲でふ想念を以て、自己を慰藉し、我れ失せ去るも何かあらん、我をして他を思はしめよと吾等は云ふ。されど其の他なるものも、自己よりは一層云ふに足らざるものとなつて居る。凡て人類の悲哀は始ご一様に、緩和せらるべき價値なく、人類の幸福も、精々善く見たる所にて、増加せらるべき價値なきまでに、餘りに些細なるものと思はれるのである。

シーリー著「自然宗教」二百五十頁。

此の語は陰氣であるので、予は之を極言し痛論することを好まない、假令、靈魂不滅の信仰を失ふとも、人間の爲に奉仕する行は斷えず存続するものと予は信ずる。然れども人間や事物に無限の價値あるがため極力之に仕へ之を救はんとする盡力は終に存続せぬであらう。現世界は結局信ずる人によりて、神を信ずるかさなくば人間を信ずる人によりて、贖はれるのである。如何ほど卑賤極悪なるものでも、如何なる犠牲にもかけ合つて餘りあるほど貴きものを有

し、又永劫に之を有するが故に、救はるべき價値人間に存すと確信する人々に依りて世は始めて贖はれるのである。予は此の信念と、個人の不滅とを信ずる積極的信仰とを同一視するのではないが、兩者の互に關聯せることは、國民歴史の事實に據りても、個人生活の經驗に據りても、一様に證明し得らるゝことと信ずる。

此の問題の必要を閉却し、或は縮小せんとする近代の傾向に就いても、亦注意すべきものがある。近世文學中最も眞面目なる種類のものにても、著しく之を閉却して居る。哲學に於ては故デュームス教授の如き非唯物論的氣質の著者さへも靈魂不滅論を記すに當り、之に對する感覺は最も痛切なる種類に屬せずして寧ろ『第二義』の論題であることを許して居る。「人間の不滅」(インガルス講義)四百二十頁。今日の宗教的教訓に於ても、現世界の外、他界に就いては餘り言ふ所がない、斯くの如き沈黙は或意味より云はゞ敢て損失ともならぬ、何となれば

斯かる大問題は輕率に語るべきものでないからだ。若し「通俗説教者」が之を演題ともなさば、或は神聖を瀆すこともならう。然れど予は怪しむ、此の疑問が斯く敬遠せらるゝにしても、之が眞實に男女の心中に閑却せらるべきものなるか。予は其の然ることを信じない。斯くの如き疑問の痛切緊要なる所は、單に時代の文學、哲學、若しくは講壇の氣分に現はるるものでない、其れよりも遙かに根底深き恆久的なる或者に潜んで居る。前章に於ては善く世に知られ居るを以て省略したれど、此所には至極適切なる例として、ブラウニングの詩の一節を引用する。

恰も吾等が最も安全なる時、日没の心に觸るゝことあり、

釣鐘草を見て生ずる或る感じ、世を去りし人のこと、

ユーリピアースの鬪を結ぶコオラス、

これ等々へ五十を數ふる希望と恐怖とを喚ひ起すに足れり。(「プロウングラム」
監督の辯證)

其の言顯はし方は如何様であるとしても此は人間性質に照して永久に眞實なるを以て、斯かる大疑問を閉づるは人間心情に存する或るものを嵌する事となる。眞實愛するとは如何なることなるを知る人々に於て特に然り、其の者の死に就いて、又死後如何になるかに就いて、考へずして愛せんとするも其は不可能の事である。多數の者に取りて、靈魂不滅に關する疑問全體が自己實際の問題となり始むるのは他の場合よりも、多くは斯かる場合にあると信ぜざるを得ない。彼等の思想が之に對して最初覺醒する所以は、哲學の或原理に由るにあらず、宗教の教義に由るにもあらず、復た自己の死滅を思念し得ざるが故にあらず、未來の審判を怖るゝが故にもあらず、たゞ其の愛する者の顔を眺めたる時に初めて覺醒する者が多い。生ける時、其の如何に迅速に飛去るかを思ふが故なるか、或は死せる時、彼等が愛の交際が永遠に終れりとは思ひ得られざるが故なるか、孰れにしても可なり。プラトイも遠き昔既に之を認めて居た。

彼曰く（或はソクラテースの言であるかも知れぬ）『多數の人々は地上の戀人、或は妻子に會ひて相共に語らんと希望に勵まされ、他界に赴くことを願へり』と。「フィード」六十八項。ホーマーにも此の思想。今日の父の心、戀人の心、寡婦の心にもこの情はかはりなし。近くはヴィクトリア朝時代の英國二大詩人も端なく此の疑問に遭遇することとなつた、アーサー・ハラムの死後に作れる『イン・メモリアム』に於けるテニスン、『愛する親友』が『語りつ笑ひつ』し居たる時、突如として天に召されたるために詩情を喚起されたる『ラ・サイシアス』に於けるブラウニングが其れであつた。愛は此の問題を葬ることが出来ない。昔の或詩題に『死に到るまで眞實なり』と云ふがある。唯死に到るまでと云ふか、愛に取りては餘り束の間ではないか。此の理由によりて、無数の心情は靈魂不滅の大觀念を閉却し得ないのである。

如上の論題に無頓着なりと云ふ人間性質に就いて 最早茲に多く論じないと

しても基督者が其の信仰を現實にする曉には、必ず之に對して無頓着なることが出来ない、却つて直接避く可らざる挑戦の死に存することを感ぜざるを得ない。此の事は單純なる例證にて解るのである。使徒パウロは死の挑戦を痛く感じたればこそ、靈魂不滅なくば基督教は福音であるよりも却て不幸となり、『基督者は衆ての人の中にて尤も憐れむべき者』哥林多前書、と公言するに至つた。これは或は極端なる語であるとも思はれる。未來の有無に拘はらず、現在に於て、惡人たるよりは善人たるが善く、基督教的の生活をなさぬよりは、爲すが善いではないか。之に對して大使徒は或は次の如くに答へるであらう。現在に於ても惡人たるよりは善人たるが善し、誠に然り、されど是は道義上に關する事である。道義は常に正當なる理由を有して居る。然るに諸君が基督教を語り、又基督教的の生活に就て語る時には、單に道義のみを意味するのではあるまいか、基督者たるには、基督教倫理の標準に適へる善人たらんとするよりも、

遙かに以上の者がある。又基督者たることは諸君が基督に頼りて天に在す父を知り之を愛するに至る事、神が基督に由りて諸君に愛を與へ、己を父と呼ばしめ諸君の生活を扶け、其の悲痛罪惡の中より諸君を救ふとの約束を知るに至る事である。これが第一義であつて道徳は之から生ずる。諸君の限りある短き生涯に之を實現せんとするも能はざる深さがあり、廣さがある。現世では始まつたばかりで又斷えず阻止せらるゝ。使徒は斯く結論するならん、若し束縛多き數年を過して後死のために萬事を斷絶せらるゝならば、基督者は斯くの如き熱切なる希望を抱いたことなく、従つて斯くの如き苦き失敗に遭遇すべき異教徒よりも更に憐れむべきものであると。予が上文をパウロの唇に借りたるは、此が彼の議論であるからと云ふよりは、寧ろ予が之を十分に識別するほどに精神的であると云ふ意味で基督者たるを以て自ら許し得ないからである。されど若し吾等が眞實基督者にてあるならば、基督に於て神を愛し神に愛せらるゝ事が情熱

であり所有であるほどの人であつたならば、之を識別し得る筈である。而して靈魂不滅に無頓着なる福音は、即ち一種の無法なる福音であることを感ずべき筈である。神は吾等を「友」と呼びながら、其の友を死滅するに任かすとはあるべきことでない。

然れど如何なれば此の事が凡て朦朧に見ゆるのであるか。希臘の悲劇作者の語は、時として使徒の語よりも眞實に聞てゆることがある。

されど人間にさりて人生よりも貴き國土

遙か彼方にありとも、

暗黒の手それを握りて

その上にもその下にも霧あり、

さればこそ、吾等は生の爲に焦心し

地上に於て此の名なく、閃くものに執着するなれ。

他界は封印されたる泉なり、

而して吾等が下の深淵も啓かれず、
斯くて吾等は永久に物語の上に漂へり。

ユーリヒアーズ作「ヒポリダス」、
一篇百八十九行以下九十七行。

「物語」。然り、少くとも之より吾等は救はれることが出来る。死の事實が如何なるにもせよ、吾等をして試みに其れを視せしめよ。

一度び其所に眼を轉ずれば、直に瓦解といふ分明なる、而して怖るべき事實を見る。身體の物質的機關が瓦解する時、有機的組織の一機能即ち少くとも其の附隨物たる意識生活が、疑ふ餘地もなく明白に終ると云ふ單純なる斷定、科學は屢ば之が經驗的眞理であると主張した。若し之を事實とすれば、問題は無くなつて了ふ。其の事實なるや否は單一なる論點、即ち肉體滅亡すれば、意識も亦歇まねばならぬほどに、人間の意識生活が、滅亡すべき肉體的組織に關係せるや否やと云ふことに依りて決せらる。こは吾等が更に論歩を進むるに先つて

解決し置くべき疑問である。

此の疑問に對する解答は、身體と精神、腦と心との間に如何なる種類の關係あるかと云ふことに懸つて居る。此の議論に關する要領はゲーテの「人間問答」に於て「不滅論」に於て一層よく發揮せられて居る。兩者の間に或る關係の存することは、固より争ひ難いのみならず、驚くべきほど微妙に錯綜して、肉體的運動は盡く心的運動に伴うて居るのである。然れども關係の方法に至りては單一でない。例へば蒸氣は機關車に關係して居る。若し諸君が其の機關を破壊せば、蒸氣は乍ら無くなつて了ふ。何故なるか。其の關係が原因的のものである、機關は蒸氣を生ぜしむる原因であるからである。されど試みに三稜鏡に於ける光線を例とせよ。光線の屈折と色彩とは三稜鏡に對して明瞭なる關係を有して居る。三稜鏡の運動は屈折と色彩との運動に伴ふのであるが若し諸君にして其の三稜鏡を破壊すとも、光線を滅することは出来ない。何故然るか。其の關係が原因的のものでないからだ。三稜鏡は光線を出す原因とは

ならない、寧ろ光線の發散する一様式の媒介物たる關係を有して居る。然らば身體破滅後に意識生活の繼續し得らるゝや否の問題は、全く次の如くなる。物質の精神に對する關係は、機關の蒸氣に對する如き原因的のものなるか、或は三稜鏡の光線に對する如き媒介的のものなるかと云ふことになる。これを此の疑問の眞説明であるとするれば、其の瞬間に於て、如何なる科學も、既知の物理的事實によりて、靈魂不滅の不可能なることを宣告すべき何等の權能も有しないことが明かになる。何となれば科學は物質と精神と如何なる關係あるかに就いて、極めて輕微なる暗示すら有して居ないではないか。腦の分子の運動が、何故に又如何にして意識を伴ふのであるか、或は其の反對に意識が如何にして腦の分子の運動を伴ふのであるか、之に就いては如何なる説明も役立たない、想像すらなし得ない。チンダルの屢は引用したる語を用ふれば「ネクサス」 nexus は「不可解」である。然るに諸君は之が如何にして原因的「ネクサス」で

あると、獨斷的に斷定し得るのであるか。其の原因的「ネクサス」なることを明かにするに非ざれば、又三稜鏡が光線に對する如き——光線の發散する一様式の媒介物となれる——關係を明かにすに非れば、靈魂不滅の不能性を否定するは、即ち科學的事實より逸せる無法の處置となさねばならぬ、是に於て、此の問題に就いて、ヘッケルの如き不正なる獨斷的論者に對照して、ダヴィド・ヒューム以來最も公正にして最も着實なる不信仰者の一人、ジョン・スチュアート・ミルを引證せん。彼曰く「科學には靈魂不滅に反對する證據はない。たゞ其れに有利なる證據を有せずと云ふ消極的證據がある」、「宗教三論」と。されば科學は此の疑問に對して、全く不可知的、或は全然懷疑的となるべき權利を有す、何となれば物理的科學の領内に肯定的の解答を暗示するもの、一もないからだ。さればとて科學には獨斷的に否定の判定を下すべき根據も確かにないのである。

是に於て此の問題に就いては、肉體に屬せざる人間の他の方面を觀るべき準備が出来たのである。凡そ人間の性質を考察するに二つの方面がある。若し肉體的方面が限りある一時的の存在を暗示するものとすれば、他の精神的方面は之より超越せるものを暗示するのである。而して人類の生活が他の動物生活と本質上相異なる二つの點を擧ぐるとすれば、其れは理性と道徳とであるが孰れも時間及び感覺以上のものである。理性的生活は時間及び感覺以上のものである。時間に於て事物を知る所の識力は、時間よりも優れるものであるに相違ない。時間の如き概念は、之を思念する吾等が之より以上の處に立つにあらざれば得らるべきものでない。又道徳的生活をなすべき良心が、其の權威の根據を現界の事物に求むるものでない、また其の法則を定むるに事物に束縛せらるゝものでない。加之、人間の存在に關する合理的、道徳的原則が、其の目前に掲ぐる所の標的は、此の限りある生涯にては到底到達し得られないものである。

る。眞理を識るべき理性の業と、倫理的理想を實現すべき道徳の業とは、一樣に人間として吾等の負ふべきものなれど、死すべきものとしての吾等に取りては不可能の事である。精神的方面に於ける人間は斯くの如きものである。人間は己が本質に適へる鮮に人らしき生活をなさんと欲せば、思想の範疇を用ひ行爲の原則に従はねばならぬ存在者である。而して是等は孰れも「時間と場所との界限」の彼方に赴くでなければ、其の本源にも、其の満足にも達せられないのである。一言にせば人間は實際上不滅なりとするもせざるも、不滅なるかの如くに生活すべき筈の存在者なのである。

斯く人間性質中の永久的要素に就いて考ふれば、人間は少くとも此の短時間以上の生活に適へる存在者なることが解る。博士マルチノの言へる如く「若し創造者が人類に對する手筈を變更して、向後人類は現在よりも十倍、或は百倍生き長らふるものとなさんとの聖旨ありとなさば、其の意匠を遂行するため、

新に靈魂を造る必要を感じずるものはないであらう』「基督教生活の努め」は如何なる意味なるか。人間の此の靈魂、時間の中に住み居れど時間より以上なる理性、及び道徳のために生きねばならず又生くるに適應する靈魂は、自然の過程全體の中にて最高の完成であると云ふことになる。徐々として、驚くべく時には怖るべき發展の途を辿りて、進化は急かす休まず、人間てふ最高の完成に向つて活動したのである。而して其の存在者の法則は飲食、自衛、種族の繁殖等常に有限の要求を遂ぐるために生くるのみならず、尙ほ特に永久的なる本性に従ひ其の目的のためにも生くべきものとなつて居る。アリストートル曰く「神と自然との爲すことに無用なるものなし」と。人生の過程全體が合理的であると云ふことは、凡ての科學も、凡ての信仰も其の第一假定として固持すべきものなるが、其の本性に於ては永久的なるに、事實に於ては一時的なる運命に定めらるやうな存在者を生ずることが、果して合理的と云はるべきか。實際に於ては

不滅ならざるに、不滅なるかの如くに生くることを人間に要求するは、果して條理に適へることなるか。斯くの如き疑問の中には他界生活に對する吾等が主我的の慾望よりも、遙かに以上のものを含んで居る。所詮、之を慾望するものは吾等でなく、寧ろ自然が其の勞作を空しからしめざらん爲に之を要求するのではないか。これは事物の道理に據り、又自然一切の勞作の理由に據れる議論である。著名なる進化論者曰く「予が斯くの如く靈魂不滅を信ずるは、科學の證明せる事實を受納ると云ふ意味にはあらず、神の事業の合理的なるを信ずる信仰上の最高作用である」と。フイスク著「人間」の運命六十二頁。

以上は人間不滅の疑問を理性に依りて、下より上へ眺めて得たる最高論證である。然るに吾等が之を最も確實に感ずるは、之を「人間」の事實として抽象的に考ふる時にあらずして、或偉大なる靈魂の去りゆくことを思ふ時にある。「フィード」に記せる比類なき光景を讀みて、斷えず印象を受くる所以も、永

久の『觀念』と靈魂との關係を論ずるプラトリーの言説よりは、寧ろソクラテース其の人が其の大論證となつて居るからである。近代文學に於ては、ブラウニングの大膽なる確信、テニソンの一層考へ深くして然かも抑ふ可らざる信仰も、亦同じ根底を有して居る。吾等も亦此の事あるを感ずるのである。身體が凋落し崩解して皆無となるに、其中なる靈魂と品性とは成長し圓熟する、其對照の反語を感ずるのである。斯く漸次收縮して小くなり終には消ゆる肉體的な生活は、實に『耻づべきもの』peau de chagrin(バルザックの有名な物語中の文字を用ふ)なれど、道徳的生活は其の耻づべきものにあらずして、肉體終る頃に其の最も偉大なる状態に達すること屢ばあるのである。此所に不合理とも思はる、程の反語ありて、之が道徳的理性に依り、靈魂不滅のために有力なる辨證をなすのである。斯くは言ふものゝ、吾等は此の大世界を目前に控へながら、猶且つ己が信仰を樹立することを得るか。予自身に取りては其の甚だ困難なるを覺える。若し

己が信仰を精神の部屋より取出して、之を宇宙といふ廣大なる部屋に置かば、是迄充實したる強き其の音響も乍らにして弱き音調となるではないか。さればとて、予は靈魂に關する斯くの如き精神的大確信が、時間空間といふ生命なき無邊大のために氣力を失ひ、沈黙の中に葬られると思ふのではない。人間は畢竟バスカルの謂へる如く『脆弱な草ではあるが、思考し得る草である』「感想錄」審判の日に至らば精神が物質以上なることは判明するであらう。予は卑俗なる物質の無量大を以て信仰を威壓する如き物質主義を忌むのである。元來、靈魂不滅の思想をして縮小せしむるものは、生命なき無量大にはあらず、宇宙の目的の遠大なる所にある。諸君は予に告げて、自然の勞作に顯はれたる道理を信ずる信仰の一の活動として、死後人格の存續することを信ぜよと云ふ。道理とは如何にも洪大なる語である。人間、種族及び世界に關する進化の物語のうちに吾等は僅に其の一端を窺ふのみである。進化の物語には道理もあらんが、この道

理を立證するために我永久的自覺的存在を要することは殆ど無し。

暗澹たるわが坤上の多くの燼は、

消え失せたる多くの顔を偲びて嘆息す、

多くの遊星は多くの太陽にひかれながら、

消失せたる人類の塵を携へつ、回轉せん。

テニスン作「ヴァストネス」二節。

宇宙は斯くの如きものであるとしても猶ほ之を合理的なるものと考るとが出来る。

此の問題を單に個人的に觀察したれば、テニスンは宇宙を云ふ感覺の壓方を感じたと思はる。此の理由に依りてプラウニングは断定的にして殆ど「確信」と云はるべき點に達せるが、テニスンは己が信仰に他の感想を加味して、一層奥深き所がある。プラウニングは靈魂不滅に就いて、テニスンよりも靈妙なる所あれど、テニスンはプラウニングよりも是迄予の述べ來れることは單に宇宙の洪大なることのみならず、宇宙の計畫、目的の遠大なることにも關係し居たることを、此所に再び明かになし置かねばならぬ。世界の目的は予を化育し、予を

使用すれど、永久に予を要するものでない、予を使用し盡くせば一層高大なる目的に向つて過行くのである。それでも全然合理的であらう。人生の事實を觀れば大抵斯くの如くなるではないか。これは畢竟最大事物なる個人の精神と品性との蹂躪を意味すと答ふるものあらば、予は其れに同意するのであるが、其の蹂躪は人生に於て最も怖るべきことなれど、然かも避く可らざるもの、一ではなにか。予は第一章に於てシエロクスピアの人間觀より受くべき主要なる印象の一として此の事を記したのである。然れども思慮深きものはシエロクスピアに往かずとも日毎の事件に依りて明白に之を觀ることが出来る。其れに就いて如何なる説ありとも、此の世界の秩序が、斷えず智慧を消耗せしめ、能力を挫折せしむることと兩立せるは争はれざる事實となさねばならぬ。何處にも抑へつけられたる有機物の存することなるが、是等は更に遠大なる目的に向へる自然進化のために、自己を寄與したものである。人生に斯かる事實あり、宇宙に斯

かる意味あるにも拘はらず、宇宙秩序の合理的なるより、吾等に個人不滅の必然性ありとの信仰を實際上保つことを得るか、或は一層宗教的に言はゞ吾等が『神の事業は條理に適ふ』と云へる所に、此の信仰を保つことを得るか、予は大海に乗出で巨濤に翻弄せらるゝに至らば其の信仰の錨も用をなさぬことを知る。されど昔しプラトンの云へる如く——此の疑問に關して根本的なる又必要なる事は既に古代に於て云はれて居る——こは『人間の學說の中にて最善のもまた最も否認し難きもの』にして、『人間が一層確實安全に導かるべき神の言を見出し得ない以上は、多少の危険もないでないが、人はこの筏に乗つて人生の海を航するのである』。『フィードー』八十五項。

此の上何を言ふべきか、吾等は乃ち『一層確實安全に導かるべき』其の『言』を得ん爲に何方に思想を轉すべきか。是に於て我等は前論に於て再三達したる位置に復た達したのである。例へば、嘗て苦痛を論じたる時、吾等は之に就

て信仰上多少の光明を放つべき種々の點あることを觀たのであるが、其の議論の終りたる時、吾等は又苦痛よりも寧ろ神に就いて多く考ふれば、其れに依りて完き信仰に達せらるべき事を觀たのである。此の問題に於ても亦斯くの如くである、吾等は是迄人間に就き殊に人間に存する時間以上の要素に就いて考へて居たのである。而して少くとも靈魂不滅の希望に暗示を得たのである。然れども、最後に吾等が再び求むべきものは、人間に就いてよりも、寧ろ神に就いて更に多くを識ると云ふことである。其の識るべき事が何であるかは敢て言ひ難いことではない。今迄の如く神の事業の目的に就いて考ふる時、個人的不滅の信仰に十分なる保障を得られざりしは何故なるか。曩きにも概説したる如く此の宇宙的理性の遠大なる一般的目的に取りて我は個人的永劫的價値を有するものでない、少くとも必ずと云ひ得ないと云ふ所にあつた。然るに此の思想は『全受造物が依りて以て運轉』せる或終局目的を有する理性としての神を觀る

のみにして、彼の子供なる吾等に對し永久の愛と注意とを有し、個人的に深く吾等々を注意し、夜の間の暗黒裡にも吾等を離れたまふことなき父としての神を觀て居なかつたと云ふ所に缺點があつた。換言すれば、宗教的經驗によりて吾等が學ぶべく、耶穌基督によりて確實にせらるべき、此の神の思想に缺くる所がある。

斯かる思想が靈魂不滅の信仰に對する鞏固なる一基礎となるのである。これは固より人間性質の哲學より論證せらるべきものでない、神を吾等の父として識れる宗教に含蓄せらるべきものである。古の大聖徒が來世の希望に就いて沈思し、遂に的確なる信仰に達したるは單に靈魂の解剖をなさずして、神に關する此の經驗の上に其の立場を取つたからである。彼の推理の滿潮標に達せる「フィードー」の言論と、靈魂不滅に就いて最高言辭を表はせるヨブ書或は詩篇の驚くべき確信との間には、明白なる相違が存して居る。例へば「われ知る……わ

が此の皮、此の身の朽ちはてん後、われ肉を離れて神を見ん』約百九十九章二とヨブをして言はしむるものは何か。『後またわれをうけて榮光のうちに入れたまはん』詩篇七十三と詩篇の作者をして平靜に歌はしむるものは何か。彼等が哲學者なりしが故に斯く言ひ得たのではない。人間の靈魂に就いて多くの事を識りたるが故でもない。唯神は己が神己が友なることは、神自から彼等に識らしめたる所にして、其の御手に在るは小兒が父の許に在るよりも安全なりと識りたるが故である。予は一個の大なる舊約聖書學者の、單純なれど重要な語を借りて、更に此の意味を表はすこととする。

「此の事は舊約聖書にある聖徒の鑑であつた。彼等は神を識り神を見出した。神は恩寵に依りて彼等に近づき其の罪過を除きたまうた。彼等は神を親しく交はつた。神は憐れに歩んだ。神の友であつた。然かも神の子供であつた。神は彼等を愛したまふ、神は生命であつた、而して彼等に生命を與へたまうた。彼等は神が彼等を愛せざるに至ることは、不可能の事と思はれたが故に、神が彼等を死し

むることも、亦不可能の事と思つた。是に於て不朽の生命の希望即ち神を知るの希望があつた。神は自己と彼等との間の愛の絆を断つことが出来なかつた。是れ神は永遠の愛を以て愛したまふからである。神が其の大御心より彼等を離れしむること能はざるは、父が其の子を去らしむるよりも更に切なるものであつた。「婦その乳兒をわすれて己が腹の子をあはれまざるこそあらんや。穢ひかれら忘るゝこそありとも、我はなんぢを忘るゝこそなし」(以賽亞書四十章十五節)

エー・ビー・テヴィドソン著「ウエイチング、アッポン、ゴッド」百二頁。

予は再び言ふ此所に個人不滅の信仰に關する實際確實なる基礎があると。神が我を愛したまふと云ふ事は、其の自然の結果として、我は塵埃の中に死せずと云ふ事となる。若し耶穌基督によりて得たる、神と吾等との親交が實際眞實のものならば、神はこゝ數年間に成就し得らるゝよりも、以上の大愛を吾等に保證したまふのである。斯く靈魂不滅に對する論證は、論理的命題や物理的事實にて得らるゝものでない、之を得るものは唯福音あるのみである。

或者は、此所に其の思想を止むべきものとなし、之よりも以上を求むるは之

より以下を求むることになるとする。ハリオル學長故エドワード・ケアードは屢ば此の事を主張した。彼に取りて「精神的生活の證據となるものは其れ自身であり、復た然かあるべき筈である」。然るに最初の使徒、且つは使徒パウロ(他の弟子よりも基督教の精神的意義を了解せるもの)の如きものまでが「基督の復活に就いて信じ得たる事實」の上に此の思想を結着け、或は兎に角其の上に之を置くは「基督を信ずるために休徴と不思議とを要めたる」猶太人の態度にまで成下ることとなる。[宗教の進化二章 二百三十三行以下、此處に眞理もあり、思違ひもあると予には思はれる。其の眞理と云ふは、既に述べたる如く、不滅に於ける信仰の基礎は神と偕なる精神的生命にあるを以て、其の基礎を有せざる不信仰者のために、其の生命の代用として物理的證明を求むるは、只休徴と不思議とを求むと云ふ非難を招くと云ふ點にある。然れども此の事と、其の信仰——此の基礎は矢張り神と偕にする生活にあるが——基督によりて完成すと云ふ事と同一である

と思違ひしてはならぬ。基督は單に預言者でなく、豫言を成就せんために來つたものである。イースターデイに於ける復活の基督教に於ける位置は、即ち其れであつた。復活は不信仰を信仰に變へんための休徴にあらざして、信仰に對する神の完成したる語であつた。之なくば基督の死の勝利は猶ほ約束に過ぎなくなる。「基督によりて神の約束は然りとアーメンと成りて」吾等に與へられた。而して基督に由りて自己を現はしたまふ神が、其の約束を果したまふ事に就いては、信ぜらるゝにしても信ぜられざるにしても、歴史的顯現に關する觀念全體が非精神的にあらざる限りは、其の約束にも非精神的なる所のあるべき筈がない。哲學者等は或は此の種の事を必要とせざるまでに超脱せる態度を取ること容易であらうが、斯かる人々はイースターの傳説生じてより十八世紀を経たる今日に生活するものであることを忘れて居るのである。予は若しイースターなかりせば、人間の思想に不滅の信仰の生ずるは、猶ほ珍奇なる弱々

しき植物の生え出づる如きものなりとまで論及したいと思ふ。若しイースターなくば最初の基督教説教にて世に喧傳さるゝ如きことはなかつたであらう。此の點に於てイースターの事實が信仰に對して何を意味するかを考へねばならぬ。基督前に於ける舊約聖書の大聖徒の一人は斯く言つた、「確かに、吾等を愛し吾等を召して伴侶となしたまへる神は、塵の中に吾等を死なしめず、また死なしむること能はず」と。されど詩篇七十三篇の作者の如き高潔なるものでなければ達せられない此の信仰に對して神の愛に矛盾せる執拗頑迷なる死の證據が残つて居た。「父祖よ、彼等何處にありや、豫言者よ、彼等永久に住みたりや」と問ふも「死は最後の分界線なり」との外に答へを得ることは出来なかつた。死は昔しも今も變ることなく進行し、古人を葬りたる父老、亦た今人に葬られねばならぬ。「休息は即ち沈黙である」。然かも其の間、吾等の不完全なる生涯に神の愛と力とは未だ能く十分に顯はれて居ないと考へたので、信仰は猶ほ

幾分か生くることを得て居たのである。斯くて基督われらに來りたまふこと、なつた。彼は實に終局的の眞正なる全顯現と見做さるべき理由を具へて居た。彼は靈魂不滅に就いて疑惑に陥るものゝ多かりし中にも、なほ忠實に懷抱せられたる希望を成就し、神の愛する子供等に語りたまへる最後の語は死にあらず生なりとの保障を與へしか。或は「父の愛する獨子」なる基督すら、猶ほ死は最後の界限となり、「休息」は「沈黙」なりしか。若し然らば、信仰は其の大なる希望を抱きながら、常に其の保障を得ざるのみならず、曾て經驗したることなき失望を味ひながらも、否むべからざる死の許に立歸らねばならぬではないか。

灰は灰へ、塵は塵へ、

不正なるものゝ逝く如く、正しきものも亦――

然り、彼の獨りの正しきものも亦逝けり！

是れ一の悲しき眞の福音なり

エー・エツナ・クラウ作「イースター、デイ」の一節

予は反復す、耶穌基督の最後の事實は普通の終點なる墓であつたが、宗教心が能く其れに打勝つたとか考ふべき理由を見ない。若し教會がイースターの使命を有せず、新約聖書が耶穌基督の復活の書でなかつたならば、信仰は確かに其れに打勝ち得なかつたであらう。

復活の物語を驢迎せず、見易き困難のために當惑せる人々に向つて、專斷的に之を陳ぶるは、常に愛の徳を缺くのみならず、義に於てなすべきことでない。此所には事實の證明を適用するに不可能の點があり、未だ説明されざる所もあり、歴史上正當に言表はせる様式を見出すのは不可能であると、斯く言ふ人々を予は理解し、其の意見に同情することも出来る。されど予の同情し得ざるもの、又予が知力上尊敬を拂ひ得ざるものは、此の事件に關して、時には合理的批評なりと云つて吾等に提出し來る所の輕佻なる説明である。扱て此所に最も興味ある比類なき歴史上の問題がある、即ち初代教會の歡喜の福音に或る合理的

的説明を與ふることである。これは復活の物語に關する如何なる文書よりも遙かに古き事實なることを記憶せねばならぬ。然るに主の蒼白めたる首の力なく垂るゝを見成りたる人によ、主の死體を墓に葬りたる人々が數日の中に、次に記せる如き事よりして、其の現實と終局との印象に打克ち得たとは想はれないではないか。

「彼再び來りたまはざる可らず」斯く細語ける人々、待篤れながら互に其の面を見かけせり。「彼再び來りたまはざる可らず」湖水も斯く細語きぬ。懐へば僅に二週りの週の前に、彼が歴巡りたまひたる土地の樹木も、其の四圍の夜嵐も亦斯く細語きぬ「我は再び彼を見ざる可らず」彼を知らずと相みたるペテロは云へり「若し然らずば我は生くること能はず」と。

「聞けよ、ペテロ、なんぢ或者を見ざりしや」
 其の翌日最初の風説は起れり 蘇物語「英譯七十五、六頁」

同じ著者は其書の序文のうちに「獨逸の科學的研究に據りて調査したる所によれば是が復活の物語の起原である」と論じて居る。斯くも十分に手入れし

たる記事は到底科學的歴史と云はるべきものでない。元來斯かるものは科學でない、歴史でもない、徹頭徹尾想像である。先づ耶穌の死後、其の弟子の心的状態に就いて吾等に認めらるゝ唯一の閃光は何なるか。「彼再び來らざる可らず」と云へる點には毫もないのである。寧ろ萬事終れりと靜かに諦めたる點にあるではないか。「われらイスラエルを贖はん者は此の人なりと望みたり」、恐らく斯くなるならんと思ひたれど事實は斯くならずとは、弟子等の心中に去來したる眞の閃光なるが、之に代ふるに一片の證據もなく平然として「彼再び來りたまはざる可らず」と細語ける人々の純然たる想像畫を以てせんとするは、徒らに歴史に蛇足を加ふるものと云はねばならぬ。猶ほペテロは感情的(神經的)と云はずとも)氣分の人であつたとしても、濟まぬことをなしたと思へる死せる友を再び見んと憬がれたる最初の人にして、又最後の人であらうか。斯くも懐かしき師を見んと憬がるゝ人々の愛が「風説」のみを聞きて満足せらる

べきか。諸君が死せりと想ひたる最も親愛なる者猶ほ生くとの風説を聞かば諸君は乃ち之を確かめんとするではないか、其れが正しく愛ではないか。路加傳二十四章十二節以下二十四節に於て、弟子は現に斯くしたのである。其結果「かれた見ざりし」が故に、彼等は「哀しむ」(十七節)に陥り、フレンセンの描ける気分となつたのである。

若しペテロ(或はマグダラのマリヤ)の如きものが、此の風説を流布したりとするも、之を吟味するにトマスが居たではないか。殊に之に就いては不俱戴天の敵とも云ふべき儕輩は、其の風説の事實らしく喧傳するを聞かば、使徒等と徒らに議論をなし、或は使徒等を虐殺するなどのことなく、直に耶穌の屍を發掘して、其の謀略を指摘したではあるまいか。予は此所に之を論ずるのではない。これは既に多數のもの、幾度も論じた所である。其の説全體の不十分なることは、カイクのなせし如く弟子等の許に耶穌生くと云ふ「天よりの電報」が來たと云ふ如き無理な方法に依つて僅に支ふるとが出来たことによつても分る。「ナザレの耶穌」予は「イオスター物語」の中に、適當なる様式によれる歴史的表現法

にて物語らるべきものを餘すと云ふ人々に同情を有すと雖ども、「何等基礎なき自然の物語を語りて多少の基礎ある超自然の物語を疑はんとする」(チエスタート著「正統主義」七十五頁)計畫(近世の或著者が適評せる如く)には孰れの點より觀ても賛同することが出来ない。カイライルの言へる如く、これは實に歴史を「風説の蒸溜」となすものである。予は純粹なる我歴史を擇びたいと思ふ。

以上は稍側道に入りたれど、基督の復活は歴史上より觀て基督教的信仰に大なる要素を有するが故に、此所に之を論及するは肝要なることであつた。之と同時に予は此の事を以て、死よりも大なる生命を信ずる基督教的信仰の基礎となさんとするのではないが、これは既に概説したる如く、大なる希望の成就——即ち「基督は初めに結べる實」——であることをいふのである。靈魂不滅に於ける基督教的信仰の基礎は、吾等を永久の友となしたまへる神の愛に存して居る。Socii Dei sumus「吾等は神の伴侶である」に相違なし。されど其れとても靈魂

不滅の事實の基礎とはならぬ。何となれば若し然らんには信者及び聖徒のみが不滅となるからだ。かくてはプラトンの用ひたる文句の如く「悪人に餘り割の好い取引をなさしむることゝならう」。ナポレオンは臨終の時「神を信ぜんとの意志あらば不信者となる必要なし」と語つたと云ふが、之と同様に、死滅したいと思ふ人皆死滅するでないといふ得らるる。神と伴侶たる經驗の上に靈魂不滅の信仰——其の事實と區別して——の基礎を置くは、唯聖徒のみが永久の生命に對して實際確實なる希望を有することとなると思はれんが、吾等にして墓に残さるゝは不可能なりとまでに神の愛の誓約を知ると言ひ得るほど深き宗教的經驗あるもの果して幾人かある。不滅は輕々しく信すべきものでない。輕々しく之を信するは全く之を信じないことゝなる。さればとて、聖徒のみが之を知ると言ふのではない。神の愛に招かれて神の伴侶となるものは、聖徒に限らない。神は吾等を愛し、吾等に語り、吾等を贖ひ、吾等を護りたまふ、罪

人なる吾等なればとて其の恩寵に漏るゝことはない。是れは精神的經驗が進んで居ると自ら任ずるには遠い多數の人の猶ほ能く實證する所である。されば吾等も父なる神が與へんと約束したまへる、死よりも更に大なる不朽の生命に關して此の嚴かなる信仰を敢て學ぶことが出来る。日々思ひの種となれる死せる親愛なる者に就いても、之を學び、悲しき時にも希望あり、慰安あることが出来る。嘗て十字架上の盜賊、悲惨なる最後を遂げんとし、夜の暗黒彼の靈魂を包みたる時、圖らずも彼、彼も其の日バラダイスに入らんと驚くべき保證を聞きたる如く、吾等自身も早晚其の語を聞き幾分か懷疑的の驚愕をなすこともあらう。

第七章 今日の批判

今日の日

今日の日、我々の生活は、
かつての如く、
静かに過ぎて行く。
然るに、
心の中には、
何となく、
不安なものが、
蠢動している。
それは、
何故か、
私にだけ、
あるものか、
それとも、
世に於いて、
普遍的なものであるか、
それは、
私には、
分からない。
ただ、
この不安が、
私を、
悩ませ、
苦しめている。
そして、
私に、
何かを、
やらせようとしている。
それは、
何だろうか、
私には、
分からない。
ただ、
この不安が、
私を、
悩ませ、
苦しめている。
そして、
私に、
何かを、
やらせようとしている。
それは、
何だろうか、
私には、
分からない。

前数章に亘れる議論が未だ「人生の事實」一切を盡さざることは明白である、又何人も之を盡し得るとは思はぬであらう。然れども、予は人生に於ける信仰上の問題として論じたる其の方面が、代表的にして且また決定的のものなること、縦し其の議論に盡さざる所ありとしても、少くとも回避的でなかつたことは、讀者も認めらるゝならんと思ふ。此の議論に就きては猶ほ他の方面よりもせられないではないが、餘り肝要ならぬ事を言ひ過ぎる過に陥らぬ事によつて他の過ちを償ひたい故に予は寧ろ本書を結了したいと思ふ。但だ此の最後の章に於ては、異なる問題に轉して、一層有益なるものにしたいたいと考へる。元來、基督教は單に個人的生活の事實なるのみならず、又世界的生活の事實である。是れ獨逸人が世界的と稱する所以である。されば、知識上の法廷中に於ても殊に公平なる歴史の光明に依り、且つは單に個々の生活よりも更に大なる世界の事實に關聯して、基督教を吟味することが出来る。是に於て本書を終るに先

『己が贖ひたる世に甦れる、基督の活動は、
衰退せず、却つて増進す。』 アクトン伯。

ち信仰上の問題に關する此の總括的考察に就いて、多少の注意を要することである。

之に就いては相當の範圍内に於て、詳細に論ぜねばならぬが、予は此所に基督教の歴史哲學を叙述せんとするのではない、或は普通に行はるゝ方法によりて此の二十世紀間が興へる信仰上の證據を記述せんとするのではない、一章の中に斯かる事を計畫するは固より無理である。又大文明と之に入りたる基督教との關係を論せんとするのではない。往時世界の秩序を維持したる羅馬帝國が時代の淺瀬に坐礁するに至りたるは、其の國家組織が潰滅したためでなく、政治上、道徳上の緊要なる原則に關する知識缺乏のためでもない。ただ一にこの世に於て神なく望みなく、大なるもの善なるものを行ふことが出来なくなつて、唯過去の墮落と腐敗とを保存しつゝあつた爲である。兎に角、恐怖すべき比類なき時期に際し、瓦解の已むなき中より、當時の文明を救出したるものは、

實に基督教の信仰であつたが、予は此所に如何にして之を成し得したかと云ふ歴史上の問題に就いても論ぜんとするのではない。勿論人類活劇の研究者に取っては、其の問題に豪快なる興味のないではない、然れどもこれは本章の範圍内に論ずべき問題でないのだ。吾等が本章に於ける目的は極めて單純で又手近きものでなければならぬ。

前章に於てなせし如く、基督教信仰の主張に對する二十世紀間の判斷或は批判を説明するに足り、勞苦多き歴史的研究をなさずとも解決せらるべき數種の代表的、決定的の論點の中にも、特に現代の光明に依りて吟味せらるべき論點を擧ぐることにする。吾等は時間が事物を吟味すと云ふ立場から出立しよう。時間は何物よりも能く人間と行動とを落ち着いて其の評価を訂正するものである。殊に誇張せる評價を訂正して、其れに相當せる評價を附するものである。ペーコンの語の如く「真理は正しく時間の娘である」と云はれる。「斯かる觀

察點よりして、信仰が耶穌と基督教の使命とに一樣に與へたる評價に就き、今日如何に觀るべきか。是れ吾等の釋ぬべき所である。耶穌基督は常に世界人衆の中の一人であるのみならず、萬民の主にして救主であるとの見解は、既に二十世紀間の試験を経たる今日、實際取るに足らざる大言と認むべきか。基督教福音は永劫に存續すべき神の言にして、また絶對的、終局的の宗教なりとの思想は、純然たる近世問題を有する近代の世界に於ても依然價值あるものなるか。是等は信仰上肝要なる疑問である。之を論ずるに當り予は前述の如く代表的にして決定的なる論點を擧ぐることをする。

基督教は一の組織にあらずして、一の人格に對する愛着なるが故に、先づ最初に耶穌自身の評價に關する時間の解説に就いて釋ねなければならぬが、此所に吾等は教會の教義にあらず、専ら人生及び世界の事實に徴して之を吟味するのである。扱て近代神學上の思想の中に行はるゝ教理上の疑問の中に、耶穌に

關して従前よりも明瞭になれる事實がある。予は其の事實の中より吾等が疑問に最も關係ある事件を左に擧げようと思ふ。

嘗て耶穌が地上に在し、時、弟子等は「彼は罪を犯さざりき」と宣言した事がある。實に彼自身さへ、我に罪ありとなすかと或者に挑戦されたともあつたが、其の敵すら之に酬ゆることが出来なかつたと云はれて居る。「耶穌の罪なき事」は、宗教上、神學上の思想の中につねに一地位を占めた題目であつた。されど斯くの如き言辭は消極的であつて、耶穌が如何にありしかと云ふ豊富なる活ける觀念を他に與ふるよりは、寧ろ彼は如何にあらざりしかと云ふことを力説するに過ぎない。其所に満足し難い所がある。彼が如何にありしかと云ふ豊富なる觀念の得られざりしは、彼が其の同時代のものに十分に理解されざりしが故である。然るに時世は経過するにつれ、異なる時代、異なる型の人々が、耶穌に觸るゝに隨つて、始めて彼の人格の内容明かになり、其の結果従前より

も遙かに豊富なる觀念を得て、單に「罪なし」と云ふ消極的の言辭よりも、一層積極的なるものとなるに至つた。耶穌は即ち完全圓滿なる人性たることを立證されたと云へば更に良く之を言ひ表して居る。罪なしと云ふは一の要素——即ち罪——を除外するに過ぎざれど、完全圓滿なる人性にはあらゆる善を包含して居る。是に於て彼は常に最高の聖者たるのみならず、また人の子である。時世は経過するにつれて、總て大人物の性格に或界限のあることを發見するに至るものなれど、耶穌に對しては、其の事なく、却つて何れの時代の人類に取りても理想となり、インスピレーションとなるべき性格の存することを發見するのである。此所には第一世紀の大猶太人があるのではない。一個の人（a man）よりも更に以上なる人（Man）があるのである。

讀者或は之を以て、やゝ一般的に過ぐる説明なりとなし、耶穌基督の完全圓滿なることを人生及び歴史に於ける事實となすには、一層質實なる言辭にて説

明すべきことを要求せらるゝならんが、一時代に限らず、品性の一の型に限らず、あらゆる時代、あらゆる型（道徳上の惡を例外とすべきは云ふ迄もない）が基督の門下に於て最高なる物を學び得ることは、基督教が何處に於ても實際に立證せる所である故、此所に人生及び歴史に於ける一事實が存すとなさねばならぬ。苟も人間性質の領域全體に於て善なるものにして彼に接觸して強められ、深められ、淨められないものはない。彼の人格は即ち階級、學派及び宗派等に人類を別つ分界線を超越して居る。若し單に社會上、教育上、或は教會上の區別より超越すと云ふならば、敢て驚くにも足らねど、彼は其れよりは遙かに深き區別をも超越して居る。惟ふに人間生活の面積を横斷せる最も深く又最も埋め難い分界線は人種と性とであらう。然るに耶穌には更に人種上の區別がない。最初彼を師と呼びたるパルステナの猶太人にも、現代英國の基督者にも同様であるではないか、實際英國の吾等は彼を一猶太人とは思つて居な

い。又彼は極東や、亞弗利加の内地に於ける基督者に對するよりも、英國に於ける基督者に對して、特殊の關係ありと思はるゝ如きこともないではないか。次に性の分界線に就いても、男性女性の區別なく、孰れも同様に耶穌の衷に己が理想とインスピレーションとを見出すことが出来るかといふは、是か。斯かる事は二千年の年月が公平に立證せる人性及び歴史の明白なる事實である。こは「罪なし」と云ふよりも、遙かに積極的にして、豊富なる言辭を以て表はさるべき一品性であることを意味して居る。之を「完全」と云ふも餘りに漠然たる總括的の語であると思はれる。所詮其の事實は理想としてインスピレーションとして、あらゆる人性に適はしき一人格なることを意味すと云はねばならぬ。女より生れたるものにして、斯かる人格に似寄れるものすらないではないか。偉人はあつた、されど人(Men)なるものは、彼を措いて他に一人もなしと云はねばならぬ。

之に就いては、少くとも品性上の或理想に原きて猛烈に基督に反對せる近世哲學の見解に對し、一言すべき必要がある。其の主張に依れば、耶穌は特に此の一の事を有すると云ふでなく、彼の事此の事を少しづつ有するが故に不可なりと云へる如くに思はる。彼は人生特殊の標式、殊に剛健なる種類の理想と云ふよりは、寧ろアリストートルの所謂「中庸」と稱するものであると云ふ。恐らく斯れほど實際に遠ざかれる批評はあるまい。事實は之に反し、彼を信じ彼に接觸するものは、人間性質中の様々なる要素(罪惡は例外として)其の頂點に達することを經驗するのである。此の故に彼に接して覺ゆる耻辱ほど卑下せる心なく、彼の與ふる名譽心ほど高尚なるはない、基督者の如くに柔順なるものなく、基督者の如く頑強なるものはない。世俗人には彼等の如き悲哀なきと共に彼等の如き喜悅もないのである。之に優れる同情、柔和、愛は何處にもないとともに、かくも深刻なる審判、恐怖すべき峻嚴、畏懼すべき憎惡も亦何

處にもないのである。而して其の福音は人間性質一切の方面を取りて之を無趣味、無色なるデューリに煮詰むるのでなく、一人一人を取りて、之を潔め、遂には其の十倍ともなすのである。是れ歴史が立證して居る如く、基督者が世界にありて最も弱く又最も強き所以である。

此の最後の點に就いて、予は現今の哲學界に殊に特異なる、然かも狂氣じみた一哲學者の見解に對し一言したいと思ふ。基督に温和、柔順、宥恕の如き性質あるを見て、ニーチェは乃ち基督を『デカダン』decadentとなし、其の道徳を『奴隸の道徳』として排斥し、之に代ふるに『超人』の理想を説いて居る。

「非基督論」(基督教批評)の試み(三十一節)超人は『君主』の道徳を標榜し、何よりも優れる力、善惡を超越せる力を有すとしてある。予は不敬と云ふよりは、寧ろ憐れむべき彼れニーチェの所論を駁撃する暇を有せざるが故に、二人の豫言者と、人生及び歴史に於ける彼等が福音とを直に吟味することとする。予は信じて言ふ、無數の人々

の中より基督は英雄的なるものを造り出し、ニーチェは唯消耗熱患者を呼び出すと。彼の所謂『力ある』道徳は、眞の丈夫心に訴へず、却つて自我心に支配さるゝ女性的種類の人に訴へる。こはオイクンが何處かにてなす。而して、予は超人を説教す」と宣言するも、何等實力に貢献する所がない、必要なは説教するでなく之を生ずることである。ニーチェが『君主』を呼び出さんとすれば、吾等は乃ち之に應ずる不朽の語あることを憶出す。

われ其の人を呼ぶことを得、何人も亦呼ぶことを得、されどなんぢらが呼ぶ時に其の人の來るや否や
シエークスピア作「キング、ヘンリー四世」二篇三章一幕。

吾等が此の豫言者に要求するものは力の本源である、其はたゞ呼號するのみにて得らるゝものではない。實際に力あるものならば、我に『不屈の靈魂あり』とか、或は歲月『我剛毅を認む』るに至らんなどと(ヘンリーのなす如くに)觸れ廻らずとも可いのである。「インゲイクタス」を題するヘンリーの詩参照。又愛と憐

此の詩は疑もなく特異なる所多き詩である。

憫と温和とを嘲弄する如き精神に、力の本源のあるものでない。人間はただ強いつと思ふ時、最も強いつものでない。此所に其の本源があるのだ。凡そ人類の歴史に於て最も強きものは、剣にあらざりて十字架であつた。「我弱き時に強し」と(哥林多後書十)是れ其の秘訣である。基督の福音は之を有して居る。是れ十字架の基督教が多くの槌を碎きたる鐵砧なりと云はるゝ所以である。一見矛盾せる如く見ゆるものを斯く結合し得るは、基督教獨特の點である。チエスタートン氏は其の特殊の文體にて左の如くに之を説いた。

獅子が羔を併に起臥すれば、獅子が羔の如くなることは、世人が屢々假想する所である。殊にトルストイ流の思想には其の傾きがある。然れども、こゝに寧ろ羔の側の獸性併合、帝國主義にして、獅子が羔を同化するを云ふよりは、羔が獅子を同化するのである。是に於て實際の間題は獅子は羔を併に起臥しながら、猶ほ其の王者の如き猛烈なる性質を保有し得るか云ふことにある。是れ教會の解決せんとしたる問題にして、また教會の成功したる奇蹟である。(「正統主義」百七十七)

頁。此の書の巧妙に過ぐる點は、基督教の辨證としては由々しき缺點である。如何に巧妙なればこそ其心に觸るゝものでない。而して基督教は其心に觸れずしては措くことの出来ないものである。本書は則ち殆ど何等の宗教的印象をも殘し得ざる花々しき宗教辨證論の一例である。然れども本書は種々性質を異にせる人々を基督に導くに足り、此の種の著作が、基督教の位置の確實なる多くの點を讀者に示すに足りないことではない。使徒的の熱情なし)

斯くの如くに成功して、強弱兩性を兼ね有するに至りたるものは、教會にあらざりて基督である。假令然らずとも、其の説明は歴史的にして、敢て奇警なるものではない。

勿論之に依りて年月が基督信仰の基礎なりと云ふのでない。神と共に吾等に交はり、吾等を赦したまふ基督自身が、即ち其の基礎である。されど年月は、一人の人間以上なることを要求せる基督の評價を減却せざりしを以て自然の結果として、信仰を保障して居るのである。時間は斯く既に人類の主として救主として、自己を表現せる耶穌を吟味した。如何に新時代興り、新人類現はれ、新型の生活、品性、彼と接觸するに至りても、彼に缺くる所なきことを認

むるに至つた。時間は終に耶穌を往時の猶太の一野人となさず、あらゆる時代、あらゆる人類の理想、インスピレーションとして適はしきものとなした。其の最善最後の證據となるものは個人である。彼の前に出で、彼と偕となれば、我最善の自我は認識され、實現するのである。諸君の自我も亦斯くなるのである。是れ實に人の子、吾等萬民の救主である。

耶穌基督が如何にして斯くも歴史に適合するかに就いて説明例證は多く又た明白である。されど吾等は此の事を措きて、時代が基督教の使命に如何なる解説をなすかと云ふ他の論點に移らねばならぬ。之にはたゞ一の決定的吟味を試みれば十分であらう。若し基督教が標榜する如く神の最高の言辭であるとするれば、究極的の要素を有せねばならぬ。さればとて、基督教の内容が即時に悉く發見されるものでない、却つて日を追うて漸次發見されるに至ることは、從來希臘人、ラテン人、或はチュートン人の思想が、基督教の中に

未だ發見し得ざりしものを、今後東洋人の思想が何等かを發見せんとするが如きものである。此の關係に於て究極的と云ふは、福音が陳腐にならないと云ふことを意味するのである。換言すれば、他の時代の事情の下に於ては、福音が如何なる價値を有するにしても、新しき時勢に對して必要なく價値なく隨つて不用になり廢棄せられると云ふやうなものでないと云ふ意味である。これは最高絶對の宗教としての基督教の使命に對する決定的試験にして、二十世紀を経たる今日の事實と問題とに照して吟味すべき所である。現代は『初期のヴィクトリア時代』すら殆どドードー(往時、印度洋中モリスニア島に據る一種の巨鳥の名、譯者註。)に過ぎずと思はるゝほどに、思想の諸方面に長足の進歩を來したることを自覺せるを以て、特殊の意義に就いて基督教を吟味することが出来る。善かれ、悪しかれ、現代は新時代なることは確實である。其の結果、基督教の信仰及び倫理が、近世の疑問を解決するに足らずとの臆説を有するもの、近代の思想家著述家に尠くない。實

に究極的と云ふ觀念は、宗教に於ても、其の他の方面に於ても、現代の思想には受取れざる偏狭なるものとなつて居る。殊に近代の哲學者は進化の強酒に酔はされ、格別事實に就いて試験することもなく、先天的に進化の原則を基督及び基督教に適用すべきものとなして居る。今日基督教よりも優れる宗教を作らんとする、或は豫言せんとする眞摯なる計畫なきことは明白である。接神術の仲間では新しき教師の出現を豫斯して居るやうであるが其れにしても實際其の人の來るまでは論ずる必要がない。されど進化した普通の論據によりて、宗教は吾等人間に屬する一切の事物と同じく遂には衰微する時あり、基督教と雖ども此の普遍的法則より免るべからず」シー・エー・シモンズ論文「スベキユレ」と云へる思想は、世の廣く承認する所となつて居る。然れども、これは「普遍的法則」と想像せるものを先天的に制定して、容易に斷定すべからざることを言つて居るのである。先づ基督教とは何か、今日何をなし得るか、之に就いて其の事實を公

明に試験したる上にあらざれば、斷定の出來るものでない。是れ此處に吾等が吟味せんとする所以である。

予は出來得る限り正確に實際の事實に就いて、之を吟味したいと思ふ。其の方法如何は、やがて述べんとする所であるが、先づ宗教は衰退し廢滅すと云へる其の「法則」に關する一般的性質に就いて一言せねばならぬ。何が斯く思考せしむるに至れるかは歴史に依りて明かである。過去の宗教を廢棄せしめたる勢力は、其の觀念、殊に神に關する觀念が、成長しつゝある人民の道念に適はしからず、値ひせずと思はるゝ時に生じて居る。往時希臘の宗教を顛覆したる倫理的批評は、其の顯著なる興味ある一例である。希臘の宗教に認められたる神々の生活なるものは、情事、陰謀、其の他斷間なき罪惡の物語であつた。然るに希臘に於ける思想堅實なる人々は、其の倫理的意識を以て之が批評をなし始むるに至つた。例へばユーリピデースがクリウザを口説き落して後之を見

捨てたアポロ神を非難すること、正義の人が婦人誘惑者の不徳を摘發すると異なる所がない。プラトンはデュース神が人々に偽の夢を送ると云へるホーマーの物語を神にあるまじき事と見做した。斯くの如くに此の種の倫理的批評は道徳上に資する所ありたれど、希臘傳習の古き多神教を自滅せしめて了つたのである。予は耶穌基督に顯はれたる神——神學上に説かるゝ神を云ふのではない——の信仰が、斯くの如く廢棄せらるる危険ありとは思はぬ。何人と雖ども耶穌基督の面前に出でて得るものよりも更に純潔なる、或は更に道徳的、精神的なる神の觀念を衷心より得んと望むものはあるまい。其の觀念は或は餘りに高く餘りに善に過ぐることをあらんが、如何に高くして善なりとも、到底神に相應し得ざることは、倫理的感受性に富める人々の確認する所である。ゲーテ曰く「吾等が神と云ふは吾等の識れる最善のものを意味する」と。吾等は基督に優れるものあるを知らず、また想像すらなし得ない。是に於て基督教は過去に於て宗

教的信仰の確實なる解明者なりしも將來倫理的批評のために基督教信仰の廢棄さるゝ如き危険ありとは思はれぬ。されど予は之に就て論歩を進めず、又歴史的宗教の衰微に就いて此の上一般的注意をなさずして、前に掲げたる目前の疑問に關し、精細にして實際的なる吟味をなさんとするのである。

現代に特殊なる問題即ち「時代の問題」と稱するものがある。これは基督教の生じてより久しき以後の歴史に起りたるものなるが故に、予惟ふに、之を以て福音は遠き過去の時代にのみ對する使命なりや否を明かにし、又た何れの時代に對しても竭きざる新しき眞理を有するや否を知ることが出来る。斯くの如き問題、即ち近世の特徴たる問題、基督教起原當時に於ける思想の地平線にすら見えざりし所の問題を解決するに當り、福音が如何ほどまでに、之に關つて力あるかを釋ぬるならば、則ち福音に就いて精細にして實際的なる吟味をなすこととなる。斯く十分に適確なる吟味をなさしむる所の「時代の問題」の一

は、社會問題と稱するもの、他は婦人問題と稱するものである。名稱は漠然たれど不都合なことはない。吾等は此の目前の二事件が眼前の問題に關係する所以を簡略に思考したいと思ふ。

先づ斯かる問題の存在するに至りたる原因に就いては、一考すれば自から解るとである。是等は教育——一面に於ては普通教育、他の一面に於ては婦人の高等教育——の結果今日の時代に直接發生したるものなれど、其の根本的原因は、其れよりも遙かに遠き背面に存して居る。實際の事實として、其れが基督教の範圍内に存し、其の範圍外には存して居ないのである。他の宗教内に斯くの如き問題の發生したとがない。佛教の如き慈悲深き宗教に於ても然うである。これは又世俗の哲學に起因したこともない。アリストートルの哲學の如く進歩したるものに於ても然うである。其の理由は認むるに難くない。此の二種の疑問の根底には人格に關する疑問がある。例へば賃金の値上げ、境遇の改善、労働時

間の制限等を要求する社會上の問題は、其の正否は別として、啻に「有たぬ者」が「有てる者」の所有物を奪はんとする計畫ではない。其れよりも更に深い所がある。則ち多數の人民が自から機械的生活をなすことに甘んぜず、靈魂を有する存在者の生活をなすべき權利あることを覺醒するに至りたる壓迫されたる人格の努力である。婦人問題も其の當否は別として亦啻に參政權を得んとする騒動ではない其れよりも更に深い所がある。則ち婦人は最早や男子の生活に對する從屬的手段として觀らるべきものでない、充實したる意味に於て、手段にあらざして目的である所の人格をば、男子の有する如くに有する人間なることを承認せられんとする要求である。此所に此の兩運動に共通せる根本思想ありと云ふも敢て謬りではあるまい。扱て労働者若しくは婦人の人格に就いて斯かる思想が、少くとも實際上に効果を及ぼしたる意味に於て、何處より出て來りたるかは問ふを要しない。労働者及び婦人に之を鼓吹したるものは、要す

るに福音であること、ギゾーの言は最も眞實である。曰く「人類に尊稱を與へたるものはモンテスキューにあらざ、耶穌基督なり」と。「教會」。然るに、斯かる思想が所謂基督教國に於て未だ克く實行されず、其の最も忠實なる擁護者は必ずしも教會のうちより起らざりしは面目無き事と云はねばならぬ。是に於てペイル氏が最近のバムプトン講演の論題となしたる如く「福音上の非難」
一千九百七年に於けるゼームス、あるも之を否定することが出来ない。其の結果、基督
ペイル牧師のバムプトン講演。あるも之を否定することが出来ない。其の結果、基督教の名の下に社會的惡事行はれ、或は之を默認するが故に、我英國の民衆を基督教より離反せしめたるのみならず、他教國民にして基督教國の貧民窟や街路を見たる者は、其の成果の餘りに醜惡なるに避易して、耶穌基督の精神に反抗するものもあるに至つた。此の事實あるが故に、耶穌は不忠にして將に放逐されんとしたる番頭と、己が福音及び名譽とを連結して比喩談を試みられたのであるが、それにしても如上の疑問を生じたる歴史的事情を變更するものでな

5. 吾等半基督教國民は勞働者或は婦人のために、未だ正當なる處置をなし居らざれど、彼等が其の處置をせらるべき權利あることを知つて居る。此事を吾等は最初何處にて學びたるか。予は繰返す。其の解答は既に明白である。吾等は之を社會學者より學びたるにあらず、女權論者より學びたるにもあらず、自主の人のためにも奴隷のためにも死したまへる耶穌、男子の靈魂に對すると同一の標準にて婦人の靈魂にも語りたまへる耶穌より之を學んだのである、否、聞いたのである。吾等は未だ能く之を學び得たとは言はれない。

然れども予は問題其れ自身に向ひ、先づ社會問題より始めることとする、社會問題とは此の上なく漠然たる語なれど、其の意義は思想や良心の覺醒せるものに取ては、極めて現實である。此の二十世紀に於ける男女及び小兒の群集生活を見れば、希望なく秩序なくして、不幸と墮落とに陥れるが如き状態なるを以て、社會的奈落の淵を看過するものすら、其の心の奥底より厭世主義を生

ずるものなれど、其は今日予が倫理的厭世主義と云はんと欲するものにして、中世紀末葉時代の人々が、來らんとする審判を俟つより他に爲す所を知らず、世は正しく絶望的に悪しくなりたりと觀たる當時の感情とは其の趣きを異にして居る。

世は誠に悪し。

時は漸く暮れんぞす、

眞面目なれ目を覺ませよ、

審判者は門にあり。クルニイのベルナルド作「デ、コンテンプト、ムンザ」

社會的事實より生ぜる今日の厭世主義の根底は深いのである。然れども何故に深きか。是れ人々は最早や目を覺ますでなく、新覺悟を以て勞働せねばならなくなつたからである。此の故に往時其のまゝに放任し、或は神の審判に任かしたるこの問題も、現代に於て難解なる切迫せる意義を現はすに至つた。こ

は新しき種類の厭世主義なるが、其の中心には少くとも希望らしき或者を存して居る。之に由りて次で曙光の現はれ來るべきを知ると云はゞ、或は言ひ過ぐることゝなれど、慥かに曙光に先つべき暗黒である。

然れども予は此の議論を措きて、基督教の福音が如何ほどまでに此の問題に緊要なる關係を有するか、又其の解決に必要なかといふ特殊の論點に移ることとする。扱て社會改革は之を表面上より見れば、生活の物質的條件を正しく改造すべき行政上の疑問に屬して居る。斯く見做せば純然たる民事上、又は世俗上の利害に關係せる問題なるかとも思はれる。福音は假令、人間に屬する一切の事件に觸るゝとは雖ども、此の問題に必要な關係ありとは思はれぬ。されど近世思想全體の傾向に依れば、社會問題は常に行政上より解決されるものにあらず、復た生活上外部の條件を調整するも解決されるものにあらずる事は、彌よ明白になりつゝある。吾等をして次に此の事を觀察し、又之

に由りて何處まで論歩の導かれゆくかを見せしめよ。

カール・マルクスの古典的社會主義の時代より、此の問題は行政上、立法上の側面より解決を試みんとして今日に至つて居る。マルクスは資本主と労働者との間斷なき激烈なる階級戦は、中流階級が遂に打破されて其の存在せざるに至りたる時、兩者間の決戦となり、其の結果労働者の勢力優勢となりて新秩序を樹立するに至らんと豫言した。之が未だ事實とならざるは、(少くとも我英國に於て)また事實となるらしくもあらざるは、斯かる衝突が立法上、行政上の種々の讓歩調停に由りて、少くとも一時的に激烈なる闘争の生ぜざるやうになしたるが故である。衝突すると云つても盲目的に運命として突進する抽象的の二勢力の間に生ずるのでなくして事を未然に察し災を避くる方法を立て得る人と人との間である。マルクスは此の事を忘れたと見える。斯くの如くにして、革命的社會主義は概して、予は「概して」いふ、全體ではない、何となれば、革命的的精神は猶ほ存し、近來共濟主義(Syndicalism)の

名の下に復活して憲政的社會主義となつた。是等の主義者は國家機關を破壊せ居るからである。却つて之を獲得するのである。彼等は其の目的を貫徹せんがために労働黨のなす如くに議會に入り、或はシドニ・ウエップ夫妻の顯著なる事業の如く、此の事に關する當局者の考を教育するのである。斯かる行政的、立法的の社會改革は益々進捗しつゝあることなるが、此の意味に於て、吾等は十九世紀の一政治家ト卿ならんと思ふ。ト卿の言へる如く「今日は總て社會主義者なり」と言はねばならぬ。吾等は斯くあるべきもの、是非共あるべき筈のものである。英國のみを見ても、身體も精神をも養ふべき機會を殆ど得ざる状態の下に、餘儀なく生活し、「微かなる生活を營まんがために、所持の金錢を悉く費すとも、猶ほ營養不良となり、身には檻樓を纏はねばならぬ」(一九一一年十月ラリイ、リヴニイ「掲載、ビー・シー・ポー」)數百萬の民衆の存在して居る一事實は、立法上、行政上の改革に依りて、經濟的調整をなすべきことを要求して居る。

然れども、之を如何に調整すべきかとの疑問に對して、堅實なる近世思想の主なるものの中に興味ある特徴がある。政治上より社會改革に就いて、最も進歩したる識見を有する人々は、此の極めて複雑なる問題が、益々紛糾錯綜して、單に政治上の目論見にては解決の出來ざることを觀て居る。議會の立法者、社會學の専門家によりて世界の救はれることは事實である。世界は其れ自身によりて救はれねばならぬ。是れ益々明白になりつゝある思想である。

前項に掲げたる著名なる社會教育家——恐らく刻下英國に於て、最も理解力あり識見ある組合（若し斯く言はるべくば）を構成して活動せる人——が近頃「心情の轉換」[社會主義とは何ぞや。心情の轉換]（シドニ及びピアトリス、ウエツプが一と稱する如きものは、則ち新社會に到達せんとする思想の甚深なる要求を表はして居る。此の問題を解決せんとする者、また此の問題を直接解決して貰ふ者の中には、均しく此の心情の轉換がなければならぬ。前者には新しき觀念と主義の

發達がなければならぬ。物質的、主我的動機を去りて、道德的、社會的動機に由らねばならず、後者にも更に良き家、更に高き賃金、更に多くの休憩時間の外に、品性と生活とに關する新しき理想がなければならぬ。若し斯かる「心情の轉換」は立法的にあらざして個人的なるべきこと明かであるが、それなくば人々は蹂躪されたる社會の區域のために爲すべき事を爲さねばならぬと云ふ思ひをしないであらう、假し又之を爲すとしても、永久的善事を成遂げないであらう。斯くの如く社會の革新は最低級の處にても政治上の問題といふよりは、道德的個人的の問題である。フィリップ・スノウデン曰く、こは革命にては成就せず、唯「道念の發達せる各階級の男女」の協力に由る。此の語は一千九百十一年九月コンモンウェル「斯かる思想が心情、心意及び良心に透徹せざるまでは、約束されたる御國の來ること、猶ほ遠遠なり」と云はねばならぬ。エッチ・デー・ウエルス氏の如くに此の事を洞察したるものはない。彼は個人的若しくは社會的道德生

活の嚮導者として、其の勢力と資格に就いて如何に評價するとしても、確かに思考し得る人である。彼も亦『大なる轉換』を説いた。『晉に状態や制度の轉換にあらざ』して『心情心意の轉換』である。[In The Comet's Tail] 三百三頁。而して社會革新を目論む計畫者を罵倒した。彼等計畫者は、己が『伯母』や『雜貨商人』や『家庭辯護士』等を其の後援者「舊世界に對する新世」に加へんとするかと訊問した。彼は乃ち此の問題は目論見にあらざして人格、換言せば吾等自身にあることを觀た。さればとて、政治上の關係、即ち、家庭、賃金、其の他一般の物質的改造に關する、法律上、行政上改善すべき事件との關係がなくなつたと云ふのではない。たゞ其等の關係のみに止まらなくなつた、則ち個人的並に政治的、道徳的並に物質的『轉換せる心情』並に訂正せられたる條例の關係となつたと云ふのである。

吾等が論點に達するまでに、猶ほ一言して明かになし置べきことがある――

如上の事は「神の國は爾等の衷にあり」と曰へる、基督の語に立歸るにあらざれば、凡て無意義となるではないか。何が吾等の衷に其の神の國を樹てんとするのであるか何が其の轉換せる心情、其の道念、其の新しき自我を人々に與へんとするのであるか。前記の思想家は之に對して殆ど何等の光明をも與へない。予が『轉換せる心情』の論文に依りて紹介したる著者は、只新しき政治經濟を説きて『社會主義的動機を世に益々廣く適用』すべきことを提示するに過ぎない。ウエルス氏に至りては、實際何者も提供せずして、永き將來の後には『善意』來らんと云ひ或は（前節に掲げたる小説に於て）彗星の尾が忽然飛來するや、魔術的に『大なる轉換』を成就するならんとの想像を恣にするのみである。其の時に到らば戦争も、虚偽も、主我心も、醜惡なるものも、一切なくなりて、何處にも『新世界』を現出するならんと云つて居る。ベルナルド・シヨール氏は又或場合に珍しくも眞面目に労働黨員に告げて曰く『たゞ眞正の意

義に於ける宗教に依るにあらざれば、人民に入ることが出来ない。斯かる宗教は「人間を其の恐怖より救出して、宇宙の生命と合一せしめ、世界人類と全き一致をなすに至らしめるのである」が、其の福音は明かに「平等の理想を普及する」にあらねばならぬ（ショー氏の意は「平等に金錢を分配する」ことにありと云ふ）——こは「人間性質に存する眞正の缺乏に應ずる」ものであり、「凡て吾等が願望に近きものである」此の意見は「一九百一十二年四月二十八日、セ、ノーゴア、リー、氏が現はれて居る。と、彼は稍、奇妙なる考へをなして居る。人心轉換といふが如きことを要求するは無理であると嘲けるものは、基督教信者とはなれない。斯かる要求は基督教世界及び教會に福音の要求が、實際的に行はれざる所より生ぜざる最善の要求である。若し基督者が基督に對して眞實であつたならば、社會主義者の思想も敢て彗星には向はなかつたであらう。されど、社會革新の要件として、此の個人的内心の復活を必要となすものは、所謂基督者の主我的に

して罪惡に充ちたるは過去の世紀に於ける事なりとして、耶穌基督に直接導かれんために、各自其の僻見を放棄せねばならぬ。非正統派の人も正統派の人と同じく僻見に陥ることがある。予は此所に基督に就いて復た議論を始むるでない。予は只、彼を觀、彼に學び、就中、彼と偕に住むことは、世界の何者よりも得ざる新しき心情、新しき動機、新しき自我を得ると云ひたいのである。而して基督教の福音は社會問題に就いては別に解決を提供しない、之を解決せんが爲には政治的理性が猶ほ其の全精力を用ふるを待てりとしても、兎に角、之を解決するに缺く可らざるものであり、また（曩きに陳べたる如く）此の疑問全部の實際的起因となれる耶穌基督が、今猶ほ其の緊要なる活ける要素であると云ふのである。

社會問題に就いて教會は如上の關係に由り、直接何等かなすべき義務を有するものなれど、今は之を論ずべき場合でない。且つ予は他の論點に進まなけ

ればならぬ。

之より曩きに掲げたる第二の特殊問題、即ち婦人運動に入るのであるが、予が之に觸ること更に簡短であつて、且つたゞ一事を論ずるに止るも、其は本書に餘白なきが故にして、敢て重要な事件の含まれざるが故ではない。却つて此の運動は文明時代以前に於ける他の運動（基督教の福音を除きて）よりも、其の主義に深遠なる所あり、其の結果遠く影響する所がある。勿論婦人選舉權に對する運動に就いて斯く言ふのではない、選舉權は政治的理性が國家の幸福になるべしと信ずる所に從つて判決すべき廣き思想の或部分に過ぎないのである。婦人運動に至りては、單純なる參政權よりも遙かに大なるものを意味して居る、則ち男女は平等であるといふ新意義の思想あることを意味するのである。これは明かに現代の心的、道德的、また社會的空氣に浸漸しつゝある。「性の平等」てふ語は誤用せられないではないが、此所には眞意義に於て之を用ひ

ねばならぬ。男女間には固より自然的相違があり、政治上に於ても、個人的關係に於ても、常に相違がある。何事につけても男女は平等であるといふが如き愚かなることを言ふべきでない。男子が婦人に優れるものあるは、婦人が男子に優れるものあると同じことである。これは又性の對抗、或は性の戦の如き忌はしきものを言ふのではない、却つて兩者共通のものを言ふのである。人性は兩者共通なるが故に、男子と同等なる婦人は、其の人性に就いて、十分なる權利と責任とを有して居る。斯くの如く婦人の生活が其の最善を盡して、男子の生活を補足すること、男子の生活が其の最善を盡して、婦人の生活を補足すると異なる所がない。然れども、復た婦人が婦人として是れ以上の生活を有すること、男子の生活に於けると同じことである。男子の男子たるが如くに婦人は婦人たるべき權利を有して居る。又た婦人が世界の共同事業及び幸福に寄與する所は、男子と協力して始めて能く成功すること、男子が婦人と協力し

て初めて成功を収むるに等しいのであるが、之が缺乏せるより屢ば失敗を生ずる。婦人も男子も、各互に獨立して他に制限されざる直接の責任を有して居る。是れ予が婦人運動に關する根本的思想となす所にして、文明の生活全體に深大なる影響を及ぼしながら、今日吾等が目前にあり、將來も亦益々これあることであらう。予は既に福音と斯かる思想の起原との間に關係あることを指摘したが、今は福音が現代に於ても、猶ほ之に缺く可らざる活ける關係を有するものなるかを釋ねねばならぬ。

予の觸れんとする所は、唯一論點なるが、これは決して此の問題を盡すものではないが、吾等が要求せる決定的の試金石となり、且つ多言を費さずして、之に關する要件を陳ぶることが出来る。蓋し、相互平等の眼を以て觀たる彼の男女の新しい關係が最も多く之に影響し、之によりて嚴密なる吟味を受くるものは兩性間の道德標準である、これは本來人格の要求より生ぜるものなるを以

て、其の關係に依りて人格自から現はれ來らざるを得ない、又これは人格の平等に對する要求より生ぜるものなるを以て、現時一般に認めらるゝ道德上二重の標準——一は男子のため、他は婦人のため——を受容ることが出来ない、將來とても出来ないことであらう。その他、男女平等の結果が如何になるとしても、其の思想(前に説明したる意味にて)は彼の二種の法規を接近せしめ——無論急激でなく漸次に確實に——其の孰れかの方向に落着せしむるのであらう。これは則ち婦人が男子に對して一般に默認せる曖昧なる標準を公然認許するに至るとのことに意味するか、或は今日婦人に要求せる高き標準を男子にも亦同様に要求するに至るのことに意味するかである。若し前者に落着けるとすれば予は議論を中止せねばならぬ、之が何處に現はれるとしても論すべきものでなく、戦ふべきものであるからだ。斯くまでに墮落せる社會に於ては、如何なる區域にても、其の値を拂ふべきものが、常に婦人であることを注意し置かね

ばならぬ。然れども若し後者を擇ぶとすれば、予は基督教の理想と法則とを以てするにあらざれば、如何にして之を維持し得るかを訊ひたいのである。予は自然派、功利派の倫理主義のみを以て之を維持し得べく、威力を以て之を行はしめ得ると思ふことが出来ない。自然主義は正義、眞理、或は或範圍までは慈善の如き事に就いても、基督教と協力し得ないではないが、清潔に關する約束を婦人に對すると同じく男子にも守らしむる點に至つては、直に基督教と相離れねばならぬ。個人、家族、及び國家に於ける自然の結果より觀察すれば、男子は此の約束を破りながら何等の制裁をも受くべきものでないとしてあるが、婦人は明白なる理由に據りて、同様に取扱はれて居ない。これは本能的の人間が自己の便宜に供したる事實にして、之がために曩きに引照したる二重の倫理的法規の保護者等は純然たる功利派の立場より、謬りたる觀察眼を以て、都合よき例證を擧ぐるのである。是に於て予は再び問ふ、基督教より離れて、

如何にして、諸君は清潔に關する高尚なる平等の法則を維持せんとするか。勿論、清潔を守る非基督教者も極めて多いのであるが、其は個々の慣習に由るのである。予は近代の非基督教著作家、殊に小説作者(低級なるものを別としても)にして、之を法則として描寫せるものあるを見出さない。獨り耶穌基督が其の法則ではないか。予はかく云ふとき、たゞ教會若しくは神學の法典、或は教義を意味するのではない、何人の生活にても耶穌基督に觸るれば、男女孰れの生活にしても毫も異なる所なく、清潔の維持し得らるゝことを意味するのである、即ち基督が此の事件の法則、唯一の法則であると云ふのである。如上の事は婦人運動と將來の社會運動とのために緊切なれど、予はたゞ其の論點に觸れるのみなるが、最早や此の上、論及することを爲さない。議論の目的は既に明かになつた。換言すれば、両性の人格平等に關する思想よりして、一方が或は他の一方に發達すべき此の重要な論點に對して、基督教の法則と理想とは、

決して廢棄さるべきもの、不用となるべきものでなく、却つて若し此の二種の道徳的標準が、將來必然的に接近して、其の孰れかに引下げらるにあらざして、引上げらるゝか、或は人生の低級なる法則よりは、高級なる法則が擁護せられ勝利を得べき場合には、絶對的に缺くべからざるものなることを明かにし得たのである。

斯くの如く、簡短に論じたる二の特殊問題によりて、基督教使命の現代に對する價値は、不變不易であると結論することが出来ると予は思ふ。其の結論は基督教の福音が單獨にて是等の問題を解決すと云ふのではない。予が政治的理性と稱したるものに依り解決すべき所も尠からず残つて居る。神は吾等の理性を用ふる煩累を省かんために、福音を與へたまはなかつた。然れども福音は其の解決に缺く可らざる要件である。之を一層略言すれば、是等の問題には耶穌基督を要するのである。最近第二十世紀の『時代の問題』は、基督を離れて

は到底解決することが出来ないものである。

若し之を以て正鵠を得たりとするも、如上はたゞ二の代表的實證に過ぎないのであるが、其等よりも猶ほ大なる一般的眞理を表はせる例證が存して居る。予は今之を掲げて本章を終り、以て全篇の結末となさんとするのである。

若し如上の疑問が基督を要するならば、世界も亦基督を要すとは、これは現代に就いて言ふとき別けても適切である。今日の世界は刻々變化しつゝあるが故に、多數の思慮深き人々をして―其中には基督に就いて熱切なる個人的要求を有せざるものもある―凡て人類の緊要なる事件は懸りて基督教が明日の世界に於て占むる地位如何に存することを確認せしむるのである。予は此處に其一方面を記すより外に餘地を有しない。世界は則ち一になりつゝある。斯く云ふは地球上の邦土が實際悉く發見され分明になつたと云ふのみならず、更に肝要なることは、主として教育と通商との二様の要因によりて世界互に相關係せる全體の中

に結び合はされつゝあることを云ふのである。此事實の結果の著大なる極東に如くはない。極東の大國民は、今や非常なる速力にて恐るべき變化を過ぎつゝあるのである。我歐洲の歴史に於ては、文藝復興、宗教改革、佛蘭西革命、社會運動、教育上の啓蒙、其の他の名目の下に個々別々に、長期の間隙を経て遂行せられたる一切の大勢力が、今日印度、支那、及び日本に於ては一時に遂行せられつゝありといふも過言でない。其の多種多様な結果が宗教に及ぼすべき影響深大にして、避くべからざるものがあらう。多神教及び祖先崇拜は此の新時代に於ては未來を有しない。古き信仰の束縛と尊敬とを放棄しながら、未だ之に代るべきものを見出なさい。盛な物質的文明の洪水を世界に横溢せしむる爲に水門を開けんとする危機目前に迫つて居る。此の際之に代へて是等國民の擇ぶべき唯一のものは耶蘇基督の名である。基督を要するは、唯特殊の疑問のためでない。世界が彼を要して居るのである。假令人々が自己の個人生活に於て未だ其

の必要を感じないにしても、之を感じるものゝあることは、最も豫期せざる地方に於て其の徴候を現はして居る。其の最近の徴候は、支那の新共和政府が基督者の祈禱を請求したることである。此の注意を惹ける事件には、其の發表せる以外に何等の意味もないのであるが、少くも基督教は危急存亡の秋に際せる國民に於て、生活上何等か緊要なる價值ある一要素ならんとの意味を示して居る。之と同一にはあられど、恰も十六世紀前、コンスタンチン帝が偶像教の羅馬帝國を基督教に一轉せしめたるは、己が個人的信仰より起りたることにあらずして、寧ろ此の宗は予は今斯かる徴候を生ぜしめたる事實に深く立入ることは出来ないが此の事實によりて、唯二の思想、即ち世界と教會とに關する思想を陳べて本書を終ることとする。

世界に就ては耶蘇基督を離れては實際進歩の希望なしとの思想を暗示して居る。進歩は即ち光榮ある未來あることを保證せる所の、人生及歴史の公理なるかの如くに、餘りに容易く速断せんとするは進化の強酒のために陽氣になれる近世思想の傾向である。然れどもこれは餘り先見ある精確なる見解でない。進化は現世の過程として、其の恐怖すべき方面と、其の向上の方面とを有するに過

ぎない。アナトール・フランスの明快なる筆には吾等に思考せしむるものがある。曰く「人種は無限の進歩をなし得るものにあらず」他日「太陽が滅亡したる時—これは必ずあるべき災である」地球は寂寞たる空間の原野をば、人類の死灰を携へながら回轉しゆくならん」と。アルフレド・アリンソン英譯「エヒキ若し斯かる絶望的未来は餘りに遼遠にして、心裡に印象銘記するに足らずとせば、更に狭き歴史の範圍に於て、人間進歩の思想を吟味すれば如何ん。人類の歴史が何かにつけても、非常なる進歩をなしたることは事實である。其中、主要のものもを擧ぐれば、則ち知識と安樂とであらう。知識の進歩は今日の學童すら、往時アリストートルの視ひ得ざりし事物を知つて居る。安樂に於ける進歩も亦之に譲らない。二十世紀の人民の必要品は、過去時代の富豪の世に知られざる贅澤品であつた。是等の點に於て現代、即ち書籍、學校、電話、自働車の現代は過去に比類なき進歩をなして居る。然るに安樂も知識も人生に於て最も高貴な

るものではない。是に於て更に高貴なる二の事件によりて進歩の觀念を吟味せば如何ん。人生に就いて、最も實際的吟味をなし得らるゝものは、幸福と品性とである。予は想像する。然らば、人類歴史の進化に徴すれば、出來得る限り耶穌基督の法則と福音とより離れて見ても幸福と品性ととの實際確實なる進歩の跡を見出すことを得るか。予は大に之を疑ふ。予は二十世紀文明の非基督敎產物が、ペリクリーズ時代のアゼン市に住みたるもの、或は其れよりも更に閑寂なるヘラスの或場所に於て、群羊を牧しながら、怒濤の上に日光を眺めたる、往時の希臘人に優りて、幸福なるものとは思はない。品性に就いても、今日普通道徳の拘束を抛棄せる人には、羅馬の偶像敎時代に於ける肉慾の人、殘忍なる人よりも悪しきものであるとは、容易に云はるゝことである。彼等は確かに羅馬人よりも未來の責罰に値ひして居る。一言にせば、予は耶穌基督より離れたる人生及び歴史にては、人類に取りて大なる幸福も高き倫理上の尊嚴も、

確實になし得ないと思ふ。アナトオル・フランスは、前に引證したる著書の中に、人間生活に於ける最も忠直なる二人の審判官として反語と憫愍とを召喚せるが、實に適切である。是等は人間の状態が思慮ある人々に生ぜしむる所の二つの思想である。然れどもこれは人間状態の中に神的英雄あることを認めざるもの、思想である。一度び人間生活と歴史とを耶穌基督に連結し、又耶穌基督が人間及び世界に對して有したまへる使命と權能とに就いて、吾等の知り得たるものに連結すれば、其所に始めて憫愍は奥深くなりて犠牲と救済の愛となり、反語は變貌して信仰と希望とになるのである。是に於て人間運命の星たるものは實に彼である。一部は恐怖すべく、一部分は漠然たる進化の法則よりも優れるもの、また進歩の保證たるものは、永久に没することなき世の光たる彼である。

如上の思想は又特に教會にも適用せらる。今日の教會は、時代の精神的單調

と、宗教に對する無頓着とを屢ば嘆じて居る。予は此の時代の不信仰に對する斯かる酷評を其のまゝ受納るゝものでない。何となれば何人にも歴史及び傳記を讀むものは、斯くの如きことが何れの時代に於ても言はれて居るとを知らずである。且又予は良心の状態によりて一人の宗教を鑑定する如くに、一時代の宗教をも鑑定したいからである。而して現代の良心は過去の時代に其の例を見ざるほどに、明かに覺醒して居ると思はれる。それにしても猶ほ今日教會に於ける宗教生活の單調なることは、固より明白なるが、過去時代に於ては常に個人宗教の大リバイバルに由りて、教會が斯かる状態より救済されて居る。其の時、人々の靈魂覺醒して『われ救はれたために何をなすべきか』と叫んだものである。此のリバイバルを得んために休徵を求むるもの、其の發現を製造せんとするものも、亦尠くはないが、風は其の欲する處に吹いて、精神的リバイバルの靈氣は容易に來らない。是れ何故なるか。吾等は神が時代に對して語

りたまはんことを願ふものであるが、嘗て歴史上、現代に於ける如くに、明白に語りたまひしことあるか。神は正義を叫べる社會の大問題、基督に對する異教國の大要求に就いて、今日教會に語りたまうて居る。是れ覺醒せる罪人の靈魂が、自己の罪惡を自覺する如き意味にて眞實に又確實に神の聲である。教會が唯此の神の招きに應ずる時、聖靈は再び力と祝福とを以て、其の上に降りたまふではないか。是に於て將に教會に來らんとするリバイバルを得んには、先づ人々が獨り基督を措きて、他に自己の靈魂の救主なしと信ずるのみならず、彼を措きて他に世界の救主無しと信じ、再び基督に立ち歸らねばならぬ。

大正五年十月十八日印刷
大正五年十月二十日發行

定價金五拾錢

譯者 中澤正七

發行者 東京市京橋區明石町八番地
基督教興文協會代表者
エス、エチ、ウエンライト

印刷者 神奈川縣太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

印刷所 東京市京橋區銀座四丁目一番地
福音印刷合資會社東京支店

發行所 東京市八雲區
日本基督教興文協會
發賣所 教文館・醫藥社・丸善書店・福音書店
基督教書類會社・岩波書店



終

